
嵐山町

古里古墳群駒込支群

主要地方道熊谷小川秩父線（嵐山町地内）関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2009

埼玉県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では、「誰もが安心して暮らせる安心・安全 埼玉」を目指し、ひとびとの豊かな交流と活発な経済活動を支える道路網の整備に努めております。インターチェンジへのアクセス道路、道路網の骨格となる幹線道路の整備は、活力ある地域形成のために必要不可欠の課題です。主要地方道熊谷小川秩父線は、新設された関越自動車道嵐山小川インターチェンジと秩父地域を短時間で繋ぐアクセス道路として、整備が進められてきました。

建設事業地内の嵐山町古里地区には古里古墳群が所在していることから、その取り扱いについて埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路環境課の委託を受けて、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、今まで知られていなかった古墳跡の一部が発見され、馬形埴輪や円筒埴輪、土師器坏などが出土しました。遺跡の周辺は、古里古墳群や塩古墳群など古墳が密集する地域として知られており、豊かな古墳文化を復元する上での貴重な資料を加えることができました。

本書はこれら発掘調査の成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また、学術研究の基礎資料として広くご活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路環境課、東松山県土整備事務所、嵐山町教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成 21 年 3 月

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 刈 部 博

例 言

1. 本書は、埼玉県比企郡嵐山町に所在する古里古墳群駒込支群の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査に対する指示通知は以下のとおりである。
古里古墳群駒込支群（県遺跡番号 36－060）
略号 H R S T K H N G N
埼玉県比企郡嵐山町大字古里 198－4 他
指示通知 平成 14 年 3 月 7 日付け
教文第 2-122 号
3. 発掘調査は、主要地方道熊谷小川秩父線比企郡嵐山町古里地内における自転車歩行者道整備工事に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、埼玉県県土整備部道路環境課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査業団が発掘調査を実施した。また、整理報告書作成事業は、埼玉県県土整備部道路環境課から委託を受け、当事業団が実施した。
4. 各事業の委託業務名は、下記のとおりである。
発掘調査事業（平成 14 年度）
「主要地方道熊谷小川秩父線（嵐山町地内）
埋蔵文化財発掘調査委託」
整理報告書作成事業（平成 20 年度）
「自転車歩行者道整備工事（埋蔵文化財発掘調査（整理）業務委託）」
5. 本事業は、第 I－3 章の組織により実施した。発掘調査は、平成 14 年 4 月 8 日から平成 14 年 5 月 31 日まで木戸春夫・根岸洋が担当して実施した。
整理・報告書作成事業は、平成 21 年 2 月 2 日から、平成 21 年 3 月 24 日まで宮井英一が担当して実施した。
6. 遺跡の基準点測量及び空中写真撮影は（株）東京航業研究所に委託して実施した。
7. 発掘調査時の写真撮影は各担当者が行い、遺物の写真撮影は富田和夫が行った。
8. 出土品の整理・図版作成は宮井が担当して行い、大谷 徹・澤口和正の協力を得た。
9. 本書の執筆は、第 IV 章の縄文土器については宮井、その他の遺物に関する記載、観察表の作成及び第 V 章については大谷が担当し、その他は澤口が行った。
10. 本書に掲載した資料は、平成 21 年 4 月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
11. 本書の作成にあたり、下記の方々、機関からご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略）
嵐山町教育委員会 植木 弘 江原昌俊
永井智教 村上伸二

凡例

1. 本書におけるX・Yの数値は、日本測地系による国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36°00′00″、東経139°00′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。今回の調査でベンチマークとしたB-5グリッド北西杭の座標を以下に示す。杭上の標高は57.300 mである。

日本測地系

X = 10698.000 m、Y = -46690.000（北緯36°05′43.1197″、東経139°18′53.1402″）

世界測地系（変換値）

X = 11052.813 m、Y = -46982.473（北緯36°05′54.5452″、東経139°18′41.5949″）

2. 調査で使用したグリッドは国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を1グリッドとし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）と付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばR-8グリッド等と呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。

SS…古墳跡 SD…溝跡

SK…土壇 P…小穴・柱穴

5. 本書における挿図縮尺は以下のとおりである。
全測図 1：400 古墳跡 1：80
溝跡・土壇・ピット 1：60
土師器・埴輪拓影図、形象埴輪 1：4
円筒埴輪 1：5 古銭 1：1
縄文土器拓影図 1：3

6. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を表す。

7. 埴輪観察表凡例

ここで扱う円筒埴輪とは普通円筒埴輪と朝

顔形円筒埴輪の総称であり、形象埴輪とは図示方法及び観察表の記述方法が一部異なる。

表中に使用した記号や略語は各々以下のとおりである。

a. 胎土は、角閃石、石英、白色粒子、赤色粒子、チャートなどの混入物を含むものをA類、ほぼ同一の混入物を含んでいるが、角閃石粒子をほとんど含まないものをB類とした。

b. 色調は農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の『新版標準土色帖』に基づいている。

c. 焼成については器面の観察から下記のとおり分類した。

良好	普通	不良
硬質	普通	軟質

d. 外面調整及び内面調整は器表面の主体的な調整法を記し、円筒埴輪のハケメの項目の中でタテ、ヨコはハケメの方向を表す。数値は2cmの幅の中に確認できるハケメの本数を記したものである。

e. 基部粘土板の重ね合わせは、埴輪を正立させた場合に、基部を右回りに接合させたものをR接合とし、左回りに接合させたものをL接合とした。

f. 形象埴輪の胎土・色調・焼成・調整（ハケメ）等については、円筒埴輪と同じ基準である。

備考の欄には特記事項を記した。また、ヘラ記号のある場合は内外面の位置とその存在を記した。

8. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/50000及び1/25000地形図、嵐山町都市計画図1/2500を使用した。

目次

序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	IV 遺構と遺物
1. 発掘調査に至る経過 …………… 1	1. 古墳跡 …………… 15
2. 発掘調査・報告書作成の経過 …………… 2	2. 溝跡 …………… 17
3. 発掘調査・報告書作成の組織 …………… 3	3. 土壌 …………… 31
II 遺跡の立地と環境	4. ピット …………… 34
1. 地理的環境 …………… 4	5. グリッド・表採遺物…………… 35
2. 歴史的環境 …………… 5	V 調査のまとめ…………… 36
III 遺跡の概要	写真図版
1. 古墳群の概要 …………… 8	抄録
2. 調査区の概要 …………… 12	

挿図目次

第1図 遺跡の位置と埼玉県の地形 …………… 4	第12図 第7号溝跡出土円筒埴輪(2) …… 23
第2図 周辺の遺跡 …………… 7	第13図 第7号溝跡出土形象埴輪(1) …… 24
第3図 古里古墳群周辺の古墳群 …………… 10	第14図 第7号溝跡出土形象埴輪(2) …… 25
第4図 遺跡の周辺地形図と調査区位置図 …… 13	第15図 第8～11号溝跡 …………… 30
第5図 調査区全体図 …………… 14	第16図 第9・10号溝跡出土円筒埴輪 …… 31
第6図 駒込支群第27号墳 …………… 16	第17図 土壌 …………… 33
第7図 第27号墳出土土器・埴輪 …… 17	第18図 ピット …………… 34
第8図 第1～6号溝跡 …………… 19	第19図 遺構外出土遺物 …………… 35
第9図 第7号溝跡 …………… 20	第20図 ハケメ分類図 …………… 37
第10図 第7号溝跡遺物出土状況 …………… 21	第21図 第7号溝跡出土円筒埴輪の同一類型… 37
第11図 第7号溝跡出土円筒埴輪(1)………… 22	

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	6	第6表	第7号溝跡出土形象埴輪観察表(1)	27
第2表	第27号墳出土土器観察表	17	第7表	第7号溝跡出土形象埴輪観察表(2)	28
第3表	第27号墳出土円筒埴輪観察表	17	第8表	第9・10号溝跡出土円筒埴輪観察表	31
第4表	第7号溝跡出土円筒埴輪観察表(1)	26	第9表	ピット計測表	34
第5表	第7号溝跡出土円筒埴輪観察表(2)	27	第10表	遺構外出土円筒埴輪観察表	35

写真図版目次

図版1	1	古里古墳群遠景	5	第7号溝跡(第11図4)
図版2	1	調査区遠景	6	第7号溝跡(第11図5)
	2	調査区近景	7	第7号溝跡(第11図6)
図版3	1	駒込支群第27号墳	図版6	1 第7号溝跡(第11図1・2)
	2	第1号溝跡	2	第7号溝跡(第12図7~16)
	3	第2号溝跡	3	第7号溝跡(第12図17~21)
	4	第3・4号溝跡	図版7	1 第7号溝跡(第13図23)正面
	5	第5号溝跡	2	第7号溝跡(第13図23)外面
	6	第7号溝跡	3	第7号溝跡(第13図23)内面
	7	第7号溝跡遺物出土状況(1)	図版8	1 第7号溝跡(第13図22)
	8	第7号溝跡遺物出土状況(2)	2	第7号溝跡(第13図24~29)
図版4	1	第8号溝跡		(第14図30~32)
	2	第1号土壙	3	第7号溝跡(第14図33~42)
	3	第2号土壙	図版9	1 第9・10号溝跡・グリッド
	4	第3号土壙		(第16図1~3 第19図4)
	5	第4号土壙	2	表採 寛永通寶(第19図5)
	6	第7号土壙	3	1類(第11図3)
	7	第8号土壙	4	2類(第11図2)
	8	第10号土壙	5	3類(第11図1)
図版5	1	第27号墳(第7図1)	6	4類(第12図20)
	2	第27号墳(第7図2)	7	5類(第12図8)
	3	第27号墳(第7図3)	8	6類(第12図19)
	4	第7号溝跡(第11図3)		

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、円滑な道路交通を実現させるため、体系的な道路網の整備と総合的な交通渋滞対策を推進している。本報告書に係る主要地方道熊谷小川秩父線は、既存路線の円滑な交通と安心安全な道路空間を形成するための交差点及び歩道整備事業として計画されたものである。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

当該事業に先立ち、東松山土木事務所長（当時）から平成12年6月2日付け東土第243号で、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて、文化財保護課長（当時）あて照会があった。

それに対して文化財保護課は、平成13年7月2日に遺跡所在及び範囲等確認のための試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成13年7月9日付け教文第531号で次の内容の回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

名称 (NO)	種別	時代	所在地
古里古墳群 駒込支群 (36-060)	古墳群	古墳	嵐山町大字 古里字駒込

2 法手続について

工事予定地内には上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事着手に先立ち、文化財保護法第57条の3の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

別図に示した埋蔵文化財の所在する範囲については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合

には、事前に記録保存のための発掘調査を実施してください。

また、未買収地については用地買収終了後に試掘調査が必要となりますので、引き続き当課と協議してください。

なお、その他の範囲については、工事に着手して差し支えありませんが、工事中に新たに埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止し、取扱いについて当課と協議してください。

東松山土木事務所と文化財保護課・嵐山町教育委員会は、その取扱いについて協議を重ね、現状保存は困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。その後、発掘調査実施機関である（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、東松山土木事務所・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画、調査期間などについて協議した。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、同条4項の規定により、記録保存のための発掘調査を実施するよう埼玉県教育委員会教育長から通知した。その後、第57条1項の規定による発掘調査届が（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、発掘調査が実施された。

発掘通知及び発掘調査の届出に対する県教育委員会教育長からの勧告及び指示通知は次のとおりである。

発掘通知に対する勧告：

平成14年3月2日付け 教文第3-1057号

発掘調査届に対する指示通知：

平成14年3月7日付け 教文第2-122号

(生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

古里古墳群駒込支群の発掘調査は、主要地方道熊谷小川秩父線（嵐山町内）歩道整備事業に先立って平成14年4月8日から平成14年5月31日までの約2ヶ月間にわたって実施した。

調査区は、便宜上で県道熊谷小川秩父線を境にして北側に北区、南側に東区と西区を設定した。調査区の総面積は480㎡である。

4月に事務手続き及び発掘調査事務所を設置し、発掘器材の搬入を行った。発掘調査の開始と同時に重機による表土掘削を実施し、現表土から約0.4～0.7mを掘削したところで遺構確認面に達した。

表土掘削終了後、基準点測量及び人力による遺構の確認作業を行った。確認作業の結果、県道の南側に位置する東区と西区では、東区から土壌を3基検出したが、西区からは遺構は検出されなかった。一方、県道を挟んで北側に位置する北区からは古墳跡1基、溝跡11条、土壌13基、ピット10基を検出した。

検出された遺構については、東区から順次掘り下げを行った。並行して、遺構が検出されなかった西区を含め、土層の堆積状況を記録するために調査区壁面の土層断面図を作成した。

遺構の掘り下げと並行して、遺構の土層断面図を作成し、掘り下げが完了した時点で、平面図の作成及び遺構の写真撮影を行った。また、空中写真撮影の実施に向けて調査区の清掃などの準備を行い、5月9日に空中写真撮影を実施した。

その後、遺構平面図の確認及び補足作業を行い、遺構の発掘調査は5月中旬までに終了した。

下旬は撤収作業を行い、事務所の撤去及び発掘器材の撤収、調査区の埋め戻しを行った。また、発掘調査完了に伴う事務手続きを行い、重機による調査区の埋め戻しをもって発掘調査の全工程を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書の作成事業は、平成20年2月1日から平成20年3月24日までの約2ヶ月間にわたって実施した。

まず、遺物の水洗・注記、接合・復元を行い、接合が終了した遺構から遺物実測を開始した。土師器、埴輪については遺物実測機を用いて素図を作成し、それを基に実測図を作成した。また、埴輪や古銭、縄文土器は必要に応じて拓本をとった。

実測作業と並行して、発掘調査時に作成した遺構平面図と断面図の整理と修正作業を行い、第二原図を作成した。完成した第二原図は、随時スキャナーでデジタルデータに変換し、それを下図として、グラフィックソフトを使用してデジタルトレースを行った。スクリーン・諸記号を貼り込み、土層説明等の入力データを組み込んで編集を行い、遺構図版の版下を作成した。

遺物実測図は、完成したものから随時、製図ペンで墨入れ（トレース）し、それらの特徴や属性などをまとめるために観察表を作成した。

トレース作業終了後、完成したトレース図を用いて遺物図版の作成を行った。トレース図と拓本を貼り込んだ図を作成し、遺構図版と同様にデジタルデータに変換した。コンピューターで番号写植及びスケール等の貼りこみと編集を行い、遺物図版の版下を作成した。

実測図が完成した遺物は、石膏による復元作業、彩色を経て写真撮影を実施した。撮影した写真は、発掘調査時の記録写真と併せて、編集ソフトを用いて写真図版作成を行った。

作成したデータを基に原稿を執筆し、遺構図版・遺物図版・写真図版などを組み合わせる割付を作成した。原稿執筆や編集作業を3月上旬に完了し、印刷業者を選定し入稿した。校正は3回行い、平成21年3月末に報告書を刊行し、図面類、写真、遺物は整理分類して収納作業を実施した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成 14 年度（発掘調査）

理 事 長	桐 川 卓 雄	調査部	
常務理事兼管理部長	大 館 健	調 査 部 長	高 橋 一 夫
管理部		調 査 部 副 部 長	坂 野 和 信
管 理 幹	持 田 紀 男	専門調査員（調査第一担当）	村 田 健 二
		統 括 調 査 員	木 戸 春 夫
		調 査 員	根 岸 洋

平成 20 年度（報告書作成）

理 事 長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	調 査 部 長	村 田 健 二
総 務 部 副 部 長	昼 間 孝 志	調 査 部 副 部 長	磯 崎 一
総 務 課 長	松 盛 孝	整 理 第 一 課 長	宮 井 英 一

Ⅱ 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

古里古墳群は、比企郡嵐山町大字古里地区周辺に分布する。古里地区は、嵐山町及び比企丘陵の北端に位置しており、北は深谷市、東は熊谷市、西は小川町との境界となっている。

嵐山町の地形は、西方に秩父山地、東方に関東平野が広がり、大まかに山地、丘陵、台地に分けることができる。特に丘陵地形が町内の大部分を占めており、比企丘陵と東松山台地を挟んで南側の岩殿丘陵（物見山丘陵）とが区別されている。

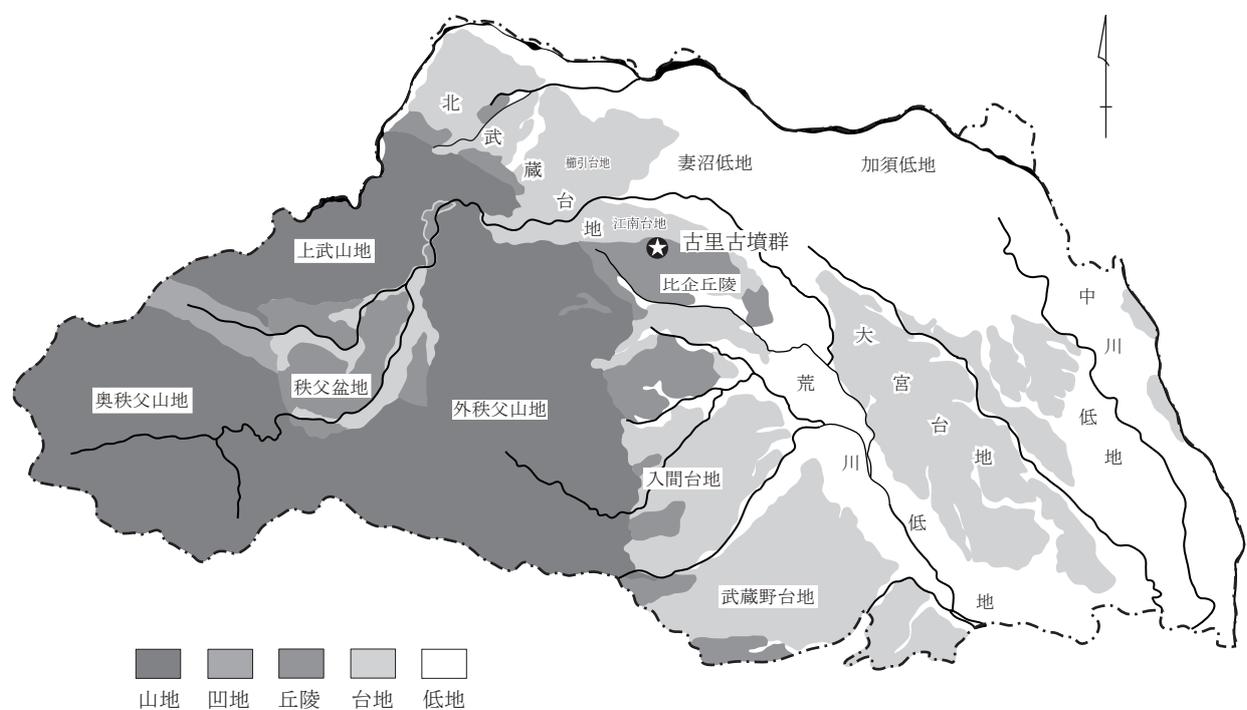
古里古墳群が立地する比企丘陵は、外秩父山地の北東縁部から東側に派生した丘陵で、北側には江南台地、南側は菅谷台地と東松山台地が広がる。標高は、二ノ宮山（132 m）を最高地点として概ね70～100 m前後である。

丘陵地帯は、槻川、兜川、滑川、粕川、市野川など中小規模河川の開析によって、いく筋もの尾

根が形成されており、樹枝状の景観を呈す。発達した谷の奥には、古くから溜池が多く存在し、谷津田の灌漑に利用されてきた。古墳群の周辺にも岩根沢沼と駒込沼が存在している。

古里古墳群の南側は、滑川が東流しているが、熊谷市との境界付近で南東に流路を変える。この滑川流域では河岸段丘の発達がみられず、丘陵と沖積地の間は緩斜面となっている。一方、古墳群の北側は東流する和田川を挟んで江南台地へと移行する。こちらは、荒川によって形成された河岸段丘の上位段丘面にあたり、下末吉面に対比されている。丘陵側は小支谷が発達し、複雑な地形が形成されている。

嵐山町の古墳群は、こうした沖積地を望む丘陵の先端部分を好んで選地しており、それぞれが尾根毎にまとまりをなして形成されている。



第1図 遺跡の位置と埼玉県の地形

2. 歴史的環境

本項では、古里古墳群周辺の遺跡について旧石器時代から古墳時代までを概観する。

旧石器時代

嵐山町内における旧石器時代遺跡は、行司免遺跡でナイフ形石器や尖頭器が出土しているほか、僅かに散見される程度である。比企丘陵は、丘陵地系に起因してカローム層が流失しているところが多いことも原因の一つとして考えられている。

江南台地では、石器集中からナイフ形石器、搔器などが出土した寄居町の赤浜牛無具利遺跡や稲荷窪遺跡が存在している。また、深谷市の白草遺跡(65)からは、細石刃が出土している。いずれにしても、県南部の大宮台地や武蔵野台地と比較するとその分布密度は希薄である。

縄文時代

縄文時代草創期では、古里古墳群内の南面する丘陵斜面に位置する北田遺跡(35)から多縄文系土器の細片が出土している。そのほか、江南台地上の四段歩遺跡(55)や上本田遺跡(63)から有舌尖頭器が発見されているが遺跡は少ない。

早期になると遺跡がやや増加するが、なお前半段階では少なく、遺跡としては四反歩遺跡、塩前遺跡(30)、北田遺跡、姥ヶ沢遺跡(72)などがあげられる。四反部遺跡からは、住居跡7軒を含む集落跡が発見されている。早期後半になると、遺物が出土する遺跡は増加する傾向にあるが、遺構の検出例は遺物が出土する遺跡の割合に対して少ない。集落跡が発見されている遺跡は、条痕文系野島式土器を伴う住居跡6軒が検出された金平遺跡や10基の炉穴が検出された亥遺跡が知られる。北田遺跡からも住居跡が1軒発見されているが、掘り込みははっきりせず、炉跡とそれを取り囲む柱穴が確認されている。

前期には遺跡が急増するが、黒浜期以降の遺跡が圧倒的に多く、前期前半段階では遺跡も少ない。前期の遺跡としては、越畑城跡(27)、寺山遺跡、花見堂遺跡、舟山遺跡(75)などが存在する。

中期になると、より集落跡の増加と大規模化が認められ、代表的な遺跡としては、行司免遺跡、中郷遺跡、金平遺跡などがあげられる。特に行司免遺跡は、大規模な環状集落を形成しており、調査された住居跡は260軒を超える。

後期になると、一変して遺跡の数も規模も急速な収束をみせるが、称名寺式土器を伴う柄鏡形の敷石住居跡が検出された金平遺跡、花見堂遺跡、行司免遺跡などで小規模な集落跡が確認される。これは晩期に至るとより顕著で、北田遺跡などの僅かな遺跡が認められる程度になる。こうした後晩期の急激な遺跡の減少は、この地域の共通事象であるが、遺跡が確認できない状態は弥生時代の後期まで続く。

弥生時代

引き続き弥生時代前期から中期にかけての遺跡はほとんど存在が確認されていない。後期になると、生産域と考えられる沖積地に面した丘陵の先端を選地して集落が形成される。滑川を望む丘陵から丘陵裾にかけては該期の遺跡がまともっており、25軒の住居跡が確認された大野田西遺跡や至近に位置する蟹沢遺跡、中期後半に遡る可能性をもつ塩新田遺跡(29)が形成される。

江南台地上では、深谷市の万願寺遺跡(59)焼谷遺跡(50)、円阿弥遺跡(62)、富士山遺跡(71)、白草遺跡、熊谷市の姥ヶ沢遺跡を含む千代遺跡群などで集落跡が確認されており、吉野川の右岸にまともな住居跡が確認されている。いずれも吉ヶ谷期の遺跡である。また、行司免遺跡からは、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭に位置づけられる10基の方形周溝墓が検出されている。

古墳時代

前期の遺跡として北田遺跡が知られる。北田遺跡からは、1軒の消失住居跡が検出されている。この住居跡及び隣接する土壇からはS字状口縁台付甕が出土しており、住居跡からは蛇紋岩製とされる勾玉も出土している。また、花見堂遺跡では、8軒の住

居跡が検出されているが全て消失住居であることに注目される。

前期後半になると丘陵上に塩古墳群第Iが形成される。2基の前方後方墳を中心として方墳20基程度で構成されており、前方後方墳からは底部穿孔された壺が出土しているが、主体部などは不明である。調査された狸塚25号墳は、一辺8mの方墳であるが、主体部は箱形木棺の直葬で、副葬品の鉄剣とガラス玉が出土しており、主体部と副葬品が発見された貴重な資料となっている。

この塩古墳群第I支群の形成が、滑川上流域における古墳の初現であり、後に展開する塩古墳群の他の支群や古里古墳群は、第I支群から派生した古墳群と捉えることもできる。

中期に該当する古墳は発見されていない。集落跡は、行司免遺跡など前期から継続する傾向が見受けられるが調査例は少ない。

後期になると、多くの古墳群が成立し、把握される遺跡数は飛躍的に増加する。しかし、古墳が丘陵から台地部分にかけて隙間なく成立している状況に対して、集落遺跡の確認例は相対的に少ない。

古里古墳群周辺の集落跡は、沖積地を挟んで対面する丘陵上の西ノ谷遺跡(9)や滑川流域の塩西遺

跡で確認されており、和田川流域では本田東台遺跡で大規模な集落跡が発見されている。

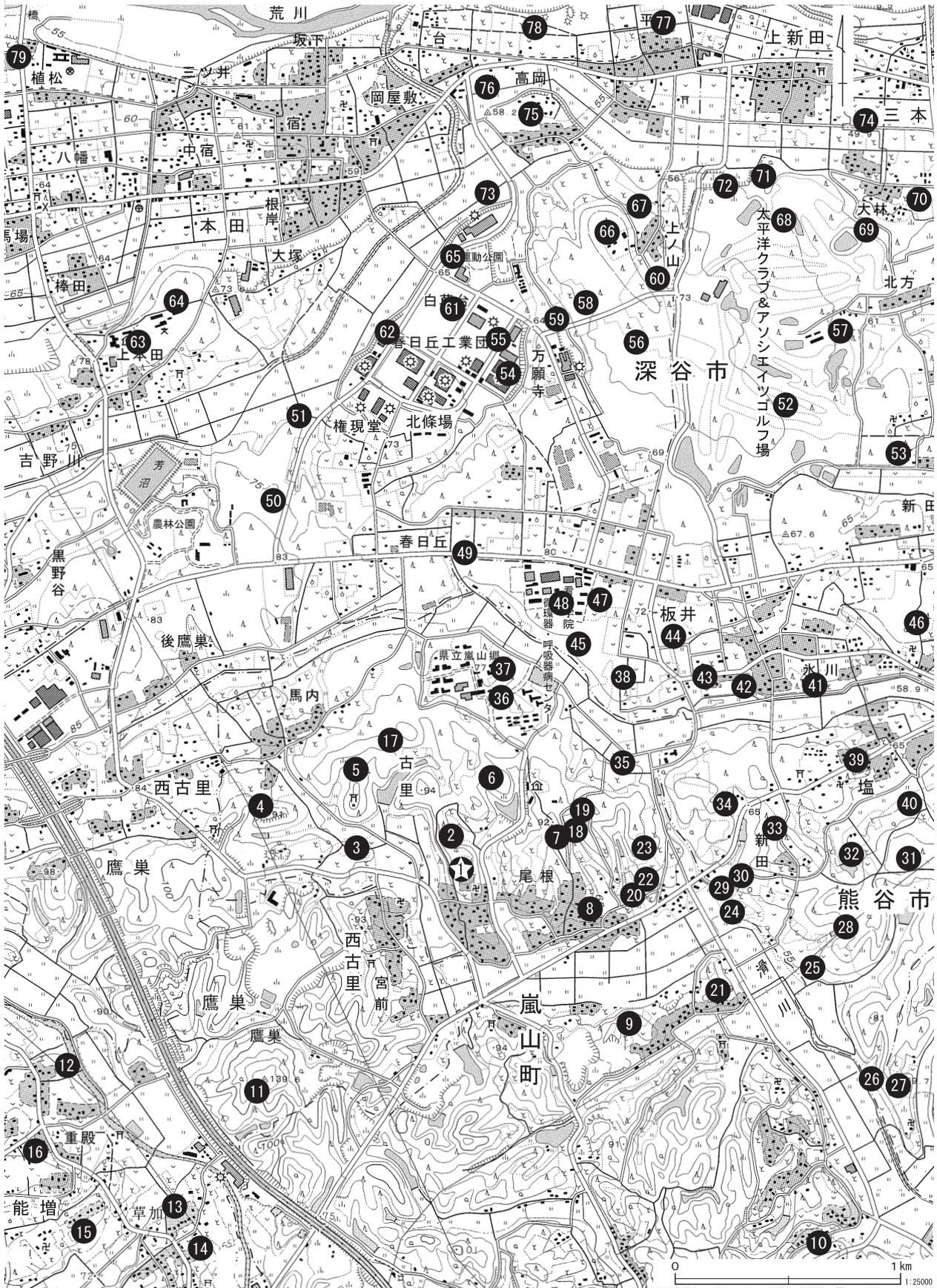
古墳群の多くは、円墳を主体とした6世紀から7世紀にかけてのもので、7世紀前後に築造されたものは、主体部に胴張を持つ横穴式石室を採用する古墳が多いといった地域的な特色が見受けられる。

滑川流域では、古里古墳群(1)や塩古墳群が存在し、和田川沿いでは、立野古墳群(38)、野原古墳群などが存在する。野原古墳群は前方後円墳を盟主墳とする古墳群で、前出の大規模集落である本田東台遺跡との関係が指摘される。荒川右岸には鹿島古墳群(78)、市ノ川流域では、物見塚古墳、屋田古墳群、花見堂古墳群、東昌寺古墳群、鷹巣山古墳(11)などが確認されている。

こうした古墳の中には、埴輪をもつ古墳も多く認められ、その供給元として複数の窯跡の存在がうかがわれるところであるが、古里古墳群の北東には、権現坂埴輪窯跡(69)や姥ヶ沢埴輪窯跡群(68)が存在するため、古里古墳群及び塩古墳群に供給された埴輪の一部は、両窯跡から供給されたと考えられる。また、両窯跡間は、距離にして約1kmと至近に位置していることから、同一の窯跡群としても捉えられ、供給圏に注目されることである。

第1表 周辺遺跡一覧表

1	古里古墳群	17	蟹沢支群	33	塩古墳群	49	春日丘遺跡	65	白草遺跡
2	二塚支群	18	岩根沢横穴墓群	34	塩荒古墳群	50	焼谷遺跡	66	清水山古墳群
3	上耕地遺跡	19	上土橋支群	35	北田遺跡	51	権現堂遺跡	67	平方前古墳群
4	五領台遺跡	20	西原遺跡	36	清水支群	52	寺内廃寺	68	姥ヶ沢埴輪窯跡群
5	藤塚支群	21	陣屋古墳群	37	茨原支群	53	結城塚古墳群	69	権現坂埴輪窯跡
6	二ツ塚古墳	22	駒込支群	38	立野古墳群	54	四反歩南遺跡	70	権現坂遺跡
7	尾根横穴墓群	23	尾根古墳群	39	塩西遺跡	55	四反歩遺跡	71	富士山遺跡
8	尾根支群	24	塩新田古墳	40	丸山遺跡	56	百済木遺跡	72	姥ヶ沢遺跡
9	西ノ谷遺跡	25	西ノ台塚群	41	出雲乃伊波比神社	57	天神谷遺跡	73	竹之花遺跡
10	泉蔵院遺跡	26	西浦古墳群	42	境田遺跡	58	荷鞍ヶ谷戸遺跡	74	上新田遺跡
11	鷹巣山古墳	27	越畑城跡	43	岩比田遺跡	59	万願寺遺跡	75	舟山遺跡
12	東遺跡	28	諸ヶ谷遺跡	44	板井・氷川遺跡	60	向山遺跡	76	山ノ腰遺跡
13	草加古墳群	29	塩新田遺跡	45	金山遺跡	61	諦光寺跡	77	平方前遺跡
14	奈良梨館跡	30	塩前遺跡	46	宝光寺比裏遺跡	62	円阿弥遺跡	78	鹿島古墳群
15	岡原遺跡	31	かのえ塚群	47	桜山遺跡	63	上本田遺跡	79	塚原古墳群
16	大杉遺跡	32	塩丸山遺跡	48	桜山古墳群	64	上大塚古墳群		



第2図 周辺の遺跡

Ⅲ 遺跡の概要

1. 古墳群の概要

古里古墳群は、嵐山町大字古里地内に所在し、外秩父山地から東方に発達した比企丘陵の北端部に位置する。丘陵は、前章で述べたように開析谷の発達によって樹枝状を呈している。古墳群は、こうした尾根状支丘ごとに小規模なまとまりで構成されており、全部で11の支群に分類されている。この11支群の総称が古里古墳群である。

古里古墳群全体で確認されている古墳の数は50基を越えているが、現状は主に畑地や住宅地となっているため、削平されて確認できない古墳を含めると相当な数に上るであろう。

古里古墳群の東側には塩古墳群が分布するが、両古墳群は行政区分上の理由で一部が重複しており、互いに不可分な存在である。2基の前方後方墳を擁する塩古墳群第1支群（狸塚支群）を始祖として一連の流れをもつと考えられる。

古墳群の形成期は6世紀前半から7世紀前半と考えられており、丘陵尾根先端部に位置する支群は埴輪をもち、丘陵上部に形成された支群は、横穴式石室をもつ比較的新しい時期に築造されたとする見解もある（植木1987）。特に、駒込支群や尾根支群、尾根西支群では、埴輪が樹立された古墳が多く認められる。

各支群は、直径20m以下を主体とした小型の円墳によって構成され、盟主墳となる前方後円墳や大型円墳は存在しない。比較的近い地域では、熊谷市の野原古墳群の前方後円墳や立野古墳群の大型円墳があげられる

また、駒込支群と尾根支群を分かち谷奥に存在する岩根沢沼の谷頭付近には、岩根沢横穴墓が開口している。東面する丘陵斜面に露呈する凝灰岩を利用して形成されており、片袖式の平面形態をもつ。確認されているのは、1基のみである。この付近は、近代の石切り場として利用されていた

ようで、本来は群をなしていたものが、その際に破壊された可能性も想定されている。

古墳群の北東には権現坂、姥ヶ沢といった埴輪窯跡が存在しており、古里古墳群からも至近であるこれらの窯跡から供給を受けていた可能性は高いものと考えられる。

現在まで、駒込支群第1号墳・2号墳、北田支群2号墳・3号墳、尾根支群第10号墳の発掘調査が実施されている。以下、駒込支群周辺に位置する各支群の様相とこれまでの調査成果について若干触れておくことにする。

駒込支群

本書で報告を行う駒込支群は、古里古墳群の東端にあたり、字駒込地内に分布する。古墳群中最大規模の支群で、これまでに26基が確認されていたが、今回の発掘調査によって新たに第27号墳が発見され、計27基となった。

古墳は、標高84.2mを頂点とする丘陵から、南に伸びる尾根の斜面及び先端部にかけて分布し、標高60m前後となる丘陵先端部に集中している。現在は、畑地と住宅地になっており、第23号墳は畑に凝灰岩製の石室が露呈している。横穴式石室と考えられるが、地域の状況からは胴張型を呈することが予想される。

支群の形成年代は、第1号墳や第27号墳の存在から6世紀前半に始まり、7世紀前半にかけて継続するものと考えられる。

昭和61年度に嵐山町遺跡調査会が発掘調査を実施しており、第1号墳と第2号墳が調査されている。それによると、第1号墳は現存する墳丘9m、推定径約20mで主体部は検出されていない。家形埴輪や円筒埴輪等が出土しており、6世紀前半の年代を与えている。

第2号墳は、当時から墳丘の遺存状態が良好

ではなく、僅かな起伏を残して大半は削平されていたようで、第1号墳の北に隣接して周溝の一部が検出されている。僅かな埴輪片が出土しているが、これらの埴輪片は、隣接する1号墳に伴うものであった可能性が高いとされている。

尾根支群

駒込支群の西方に位置し、入り込んだ谷によって駒込支群と画されているが、距離的にも至近であり、概ね同様の立地環境にある。ただし、尾根支群の方は、標高70m前後の南面する丘陵斜面に集中して築造されており、駒込支群よりも古墳の集中域が高位に形成されている。斜面裾には墳丘が現存する古墳がなく、分布状況は不明である。ただし、南西には尾根西支群が位置していることから、尾根西支群と尾根支群の間に削平された古墳が埋もれている可能性は十分に考えられる。

平成3年度に5号墳が、平成5年度には10号墳が嵐山町教育委員会によって調査されている。

5号墳は、墳丘の東半分が調査されており、規模は約20mと推定されている。埴輪列が検出されており、主体部は、粘土槨ないしは石槨の痕跡が僅かに残っていたとされる。10号墳は、墳丘直径約18m、周溝幅約3m、外径約24～25mの円墳で、埴輪列が検出されている。築造時期は、6世紀中葉から後半と考えられている。

尾根西支群

尾根西支群は、尾根支群の南西側丘陵先端部付近に形成された支群である。多くは宅地造成や耕作によって既に破壊されており、墳丘は確認できないが、3基の古墳の存在が想定されている。周

囲には埴輪片の散布が認められることから駒込支群や尾根支群とはほぼ同年代に築造されたものであろう。6世紀前半に築造を開始したものと考えられる。一方で、尾根支群や駒込支群を含めてこれらは一連の支群と捉えることができる。

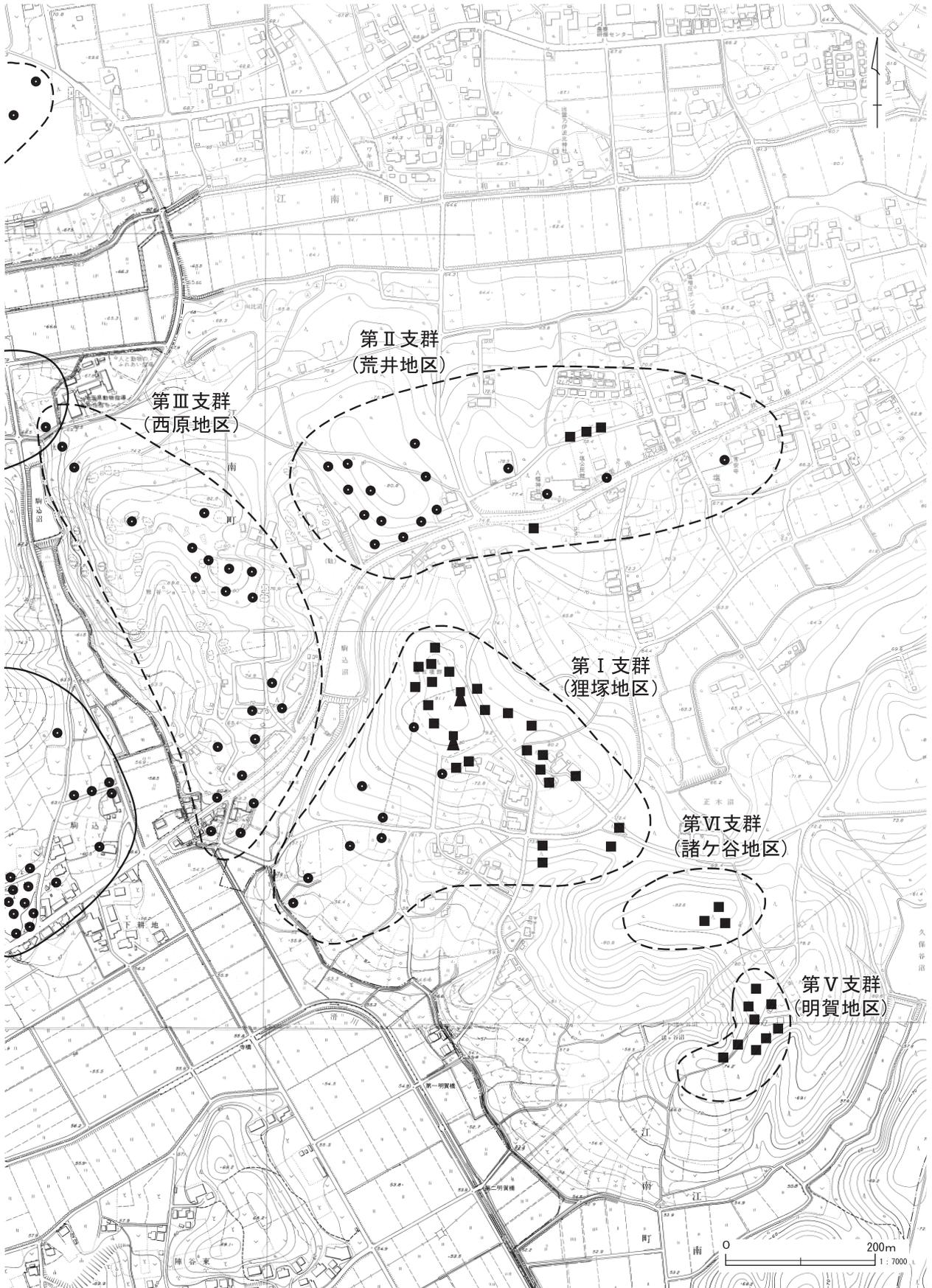
上土橋支群

上土橋支群は、駒込支群の北西に位置し、丘陵の頂点から北側に展開する。現在までに4基の円墳が確認されており、そのうち1号墳は昭和61年度に発掘調査が実施されている。

墳丘の遺存状態は比較的良好だったとされ、直径約12.5m、高さ2.6mが残存していた。その際、周溝は検出されていないが、凝灰岩の破碎礫を多量に含んだ土層が検出されている。これらのことから、この凝灰岩の切石を使用した横穴式石室を主体部とする古墳であったと推定されている。周囲の古墳群の状況からは、胴張形であった可能性が想定される。

北田支群

北田支群は、古里古墳群の北東端の和田川に面した低丘陵上に立地している。現在までに5基が確認されているが、行政区分によって西原支群と重複しており、本来は一連の古墳群と考えるべきである。北田支群の第1～3号墳は発掘調査が実施されており、主体部には凝灰岩製の胴張形の横穴式石室が採用されていることが明らかになっている。遺物は出土していないが、埴輪の樹立が認められないことや石室の形態から、築造年代は7世紀前半と考えられる。



2. 調査区の概要

調査区は、駒込支群の南東端付近にあたり、南に傾斜して延びる尾根状支丘の先端に位置している。すぐ先には滑川によって形成された沖積地が広がっており、調査区付近はちょうど丘陵地と沖積地の接続地点となっている。

調査区付近では盛土地業のためか傾斜はほとんど認められず、一見すると平坦に見えるが、全体的な地形は南にむかって緩やかに傾斜している。また、調査区の東側に開析された谷を境として、東側は熊谷市（旧江南町）となっている。

今回の調査では、県道熊谷小川秩父線に沿って三地点に調査区を設け、位置関係を基準として北区、東区、西区という名称をつけた。

遺構確認面としたローム層までは、現表土から約0.4～0.7 m程度で達するが、東区と西区は攪乱が激しく、部分的にコンクリートや碎石がローム面に及ぶ。北区は、現表土及びのその直下の層は耕作土であるが、東区や西区に比べて残りがよい。以下それぞれの調査区について概観する。

まず、県道熊谷小川秩父線から南に位置する西区と東区であるが、こちらの調査区は二ヶ所とも遺構の密度は希薄であった。東区では僅かに3基の土壙を検出したが、遺物の出土はなく構築年代は不明とせざるを得ない。西区からは、遺構を検出することができなかった。

一方、県道を挟んで北に位置する北区からは、古墳跡1基（駒込支群第27号墳）、溝跡11条、土壙13基、ピット10基が検出された。本調査区が今回の調査区中では最も面積が広い。

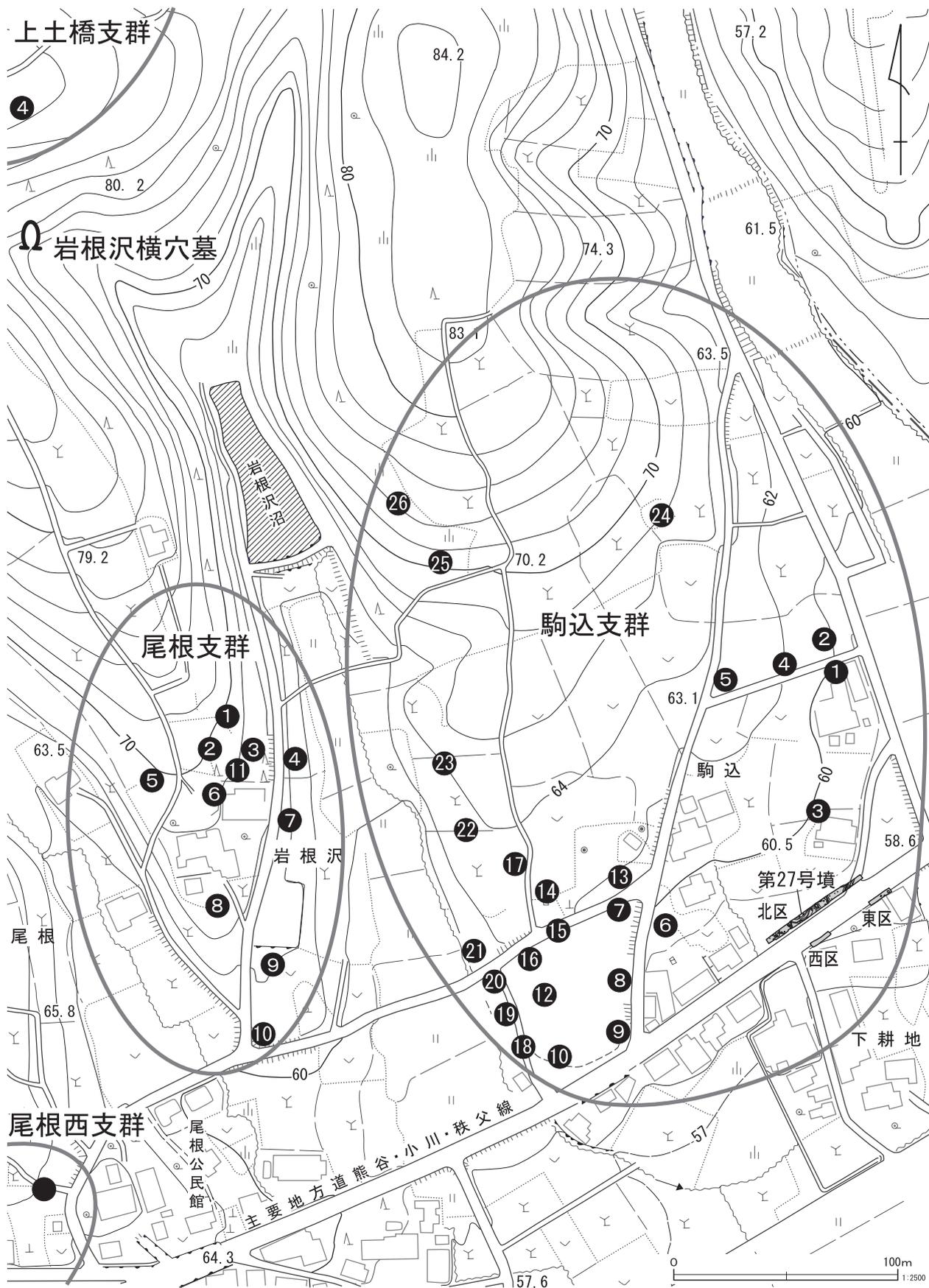
古墳群の発掘調査ではあるが、古墳時代の遺構と判断できるものは第27号墳のみである。第27号墳の墳丘は既に削平されており、現地表面からは存在を確認することはできない。このような状態から、埋葬施設も既に残存していないことが想定される。第27号墳からは、6世紀前葉と考えられる土師器の坏が1点と埴輪の細片が数点

出土している。古墳の築造年代は、これらの遺物を参考に6世紀前葉と考えられる。埴輪は、小破片が数点出土している程度のため、本古墳に伴うものか否かは、現時点で不明である。しかし、駒込支群や尾根支群の傾向と、推定される6世紀前葉という築造年代からは、埴輪を樹立していた可能性も考えられる。

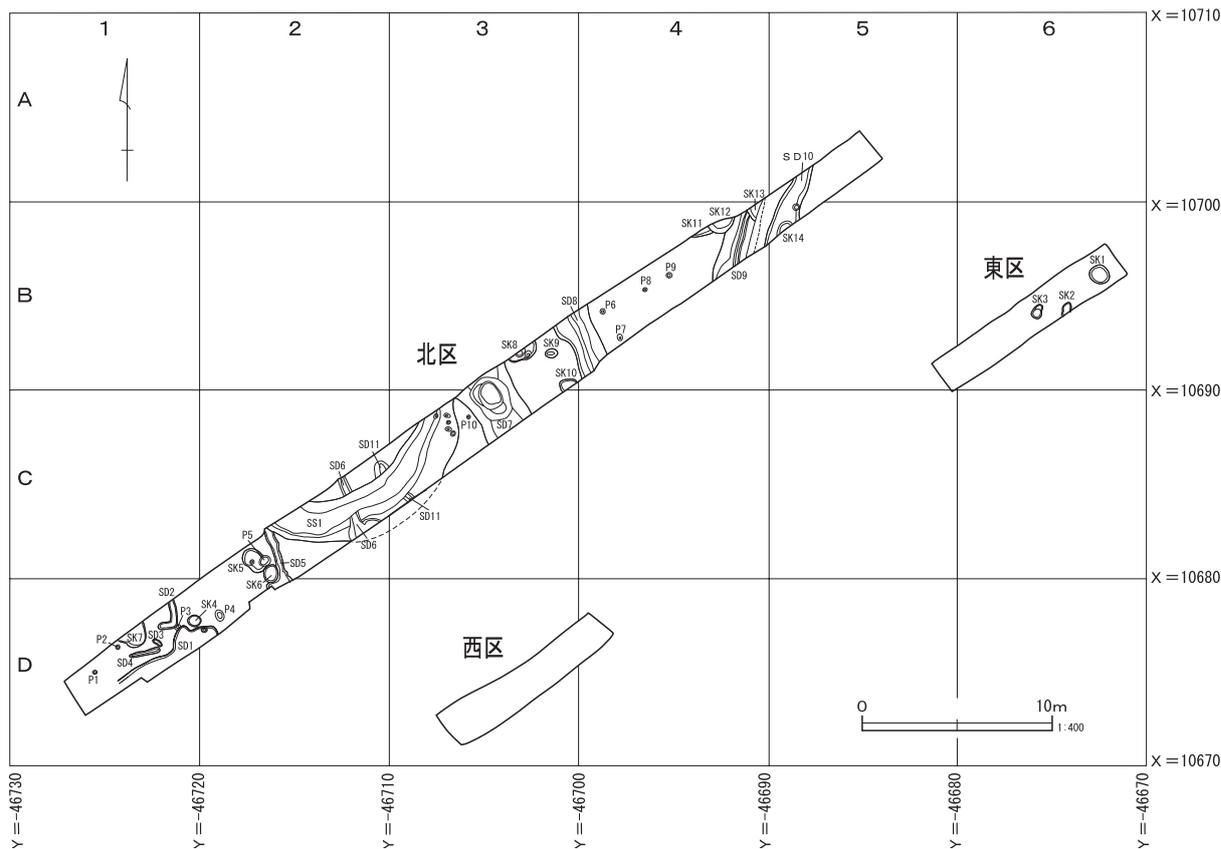
一方、第27号墳と一部が重複する第7号溝跡の覆土上層からは、円筒埴輪、馬や人物といった形象埴輪の破片がまとまった状態で発見された。こちらは、第27号墳の周溝を壊して掘削されていることから、古墳や古墳時代の遺構とは考え難い。埴輪は、周辺を開発した際に出土したものを一括廃棄したものと考えられる。また、第27号墳から出土した埴輪の量が少ないことや特徴が異なることから、第27号墳の埴輪である可能性は低いであろう。近世の陶磁器片が僅かに覆土中から出土していることから、近世以降に掘削された溝跡と考えたいところであるが、他の溝跡とは規模等が異なる点が気になるところである。

土壙、溝跡、ピットについては、既に上面が削平されているためか、総じて掘り込みが浅い。これらの遺構からは、混入である埴輪の細片が若干出土している他、年代の根拠となり得る遺物の出土はない。したがって、構築年代の特定は困難であるが、覆土の状況や調査区内の遺物出土状況からは、中世以前の年代を求めるのは難しい。調査区からは寛永通宝も1点出土しており、これら時期不明の遺構群は、耕作にともなって構築された近世以降の比較的新しい遺構群と考えるのが妥当であろうか。

溝跡は、総数で11条確認されたが、第4号溝跡などは、溝跡として表記すべきか迷うものであった。畑に伴う畝状の遺構の一部である可能性もあるが、現段階での判断は不可能であるため、調査所見に従って溝跡とした。ある程度の規模を



第4図 遺跡の周辺地形図と調査区位置図



第5図 調査区全体図

もった溝跡は、丘陵地形に沿って北-南方向に掘削されているものが多く、農業用の水路やそれに関連する施設としての利用が想定される。

また、第10号溝より東側は谷部となっていた。谷部からは、遺構の検出はなかったが埴輪片の散布が確認されており、谷地形に従って混入したものと考えられる。

土壙は、総数で13基検出したが、調査区域外に及ぶものも多い。用途などについては不明で、溝跡と重複するものが多く存在しており、溝に関連して使用された可能性が考えられる。

ピットは、総数で13基検出された。小規模で掘り込みは浅いものが多く、掘立柱建物や柵列を構成する配列状況は確認できなかった。

ほかにも調査区内からは、縄文時代の遺物として土器片が3点出土している。いずれも遺構に伴うものではないが、中期の加曾利E式に該当する

土器片と考えられる。

ちなみに昭和60～61年度に嵐山町遺跡調査会が実施した古里古墳群の発掘調査の際は、縄文時代草創期～晩期までの土器片が出土している。北田遺跡（北田支群）からの出土遺物が主体を占めているが、駒込支群からも諸磯式に該当する土器片が1点出土している。その際も遺構は検出されていないが、こうした遺物の散布状況をみ限り近隣に集落跡などの遺構が存在している可能性は高いであろう。周辺では、熊谷市塩前遺跡が前期の遺跡として知られる。

調査区の制限もあって、全容が不明な遺構が多いが、古墳群の範囲は従来確認されていた地点よりもさらに南側に広がることが確認された。また、調査区の東には谷部が形成されていることを考えると、駒込支群の東端は第27号墳付近に求められるのであろう。

IV 遺構と遺物

1. 古墳跡

駒込支群第 27 号墳（第 6 図）

駒込支群第 27 号墳は、発掘調査時において便宜的に第 1 号古墳跡（略号：SS1）と呼称して調査を実施した。しかし、本報告にあたり嵐山町教育委員会と協議した結果、既に駒込支群における古墳の所在が第 1 号墳から第 26 号墳まで確認されていることから、混乱を避けるため、本古墳跡を連番最終番号である駒込支群第 27 号墳（以下、第 27 号墳）と編号するように指示があった。

第 27 号墳は、駒込支群の古墳密集域から約 100 m 東の丘陵斜面下部に立地し、調査区内のほぼ中央となる C-2・3 グリッドに位置している。

今回の調査では、周溝の南側一部を検出することができた。半分以上は調査区域外へと及んでいるため、規模等の全容は詳らかにならないが、周溝の平面形と古墳群の様相から、円墳と考えると間違いなさであろう。

墳丘部分は既に削平されており、現地表面からは古墳の存在をうかがうことはできない。同様の理由から、主体部も既に失われていることが想定される。周溝の掘り込みは、基本土層の第Ⅲ層を掘り込んでいる。上層の第Ⅰ・Ⅱ層は、新しい時期の耕作土と考えられるため、第Ⅱ層が形成された耕作時に第 27 号墳の墳丘及び周溝の上面も削平されたとみられる。

第 5・6・7・11 号溝跡との重複関係が認められるが、断面観察によるといずれの遺構も古墳を壊して掘削されている。第 7 号溝跡からは、大量の埴輪片が出土しているが、土層断面を見ると覆土中・下層で第 27 号墳の周溝を切っていることから、こちらは同時期の遺構とは考え難い。周溝がある程度埋没した段階で、第 7 号溝が掘削されたのであろう。

規模の詳細は不明とせざるを得ないが、調査区内で検出できた限りでは、推定外径約 12 m、現存墳径 7.5 m、現存外径 11.3 m、周溝幅 1.00～1.88 m、深さ 0.46 m～0.60 m を測る。

また、北東側の周溝底面及び壁面からはピットが 5 基検出された。配列等に規則性は見当たらず、古墳に関連して構築されたものかは定かではない。しかし、他のピットは確認面からの深さが 0.09～0.39m 程度であることを考えると、周溝壁面や底面を掘り込むこれらのピットは、古墳に関わって構築されていた可能性も考えられる。

遺物は、土師器坏（1）及び埴輪片（2・3）が周溝覆土上層を中心に出土した。埴輪はすべて円筒埴輪の破片で、出土量は全体に少ない。

1 の土師器坏は、周溝北東側の外側に広がる緩斜面から破碎された状態で出土した。体部と口縁部の境に明瞭な段をもつ須恵器蓋坏の蓋模倣の模倣坏である。体部はやや浅身で、口縁部はわずかに外反して立ち上がる。口唇部は内傾する端面を作り出す。復元口径 12.6 cm、器高 4.5 cm。

2・3 は普通円筒埴輪の口縁部の破片である。やや外反して開き、口唇部は面をなし、口唇部内側に幅狭のヨコナデを強く施す。外面調整は 2 が板ナデ調整、3 が弱いタテハケ調整、内面調整は 2 がヨコナデ調整、3 がナナメハケ調整を施す。出土状況から土器は本墳に伴うものと判断されるが、埴輪の出土量は少なく、今回の調査所見からでは、築造当初に埴輪が樹立されていたかどうかを判断することは難しい。また、古墳の築造年代については、土師器坏が口縁部の直立する定形的な模倣坏よりも後出的であり、体部の扁平化や口縁部の外反傾向から 6 世紀前葉を中心とする年代に位置づけておきたい。



第7図 第27号墳出土土器・埴輪

第2表 第27号墳出土土器観察表(第7図)

番号	器種	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調④残存	形態・成形・調整技法の特徴	備考
1	土師器 坏	口径 (12.6) 器高 4.5	①石英・砂粒子・赤色粒子 ・白色粒子を含む ②良好③橙 7.5YR6/6 ④口縁部 1/4、体部 1/2 残存	模倣坏。体部はやや浅身で、口縁部はわずかに外反する。口唇部は内傾する面をなす。体部外面はヘラケズリ調整後弱いナデ調整を施す。口縁部は内外面ともヨコナデ調整を施す。底部外面に黒斑あり。器肉は全体に厚い。	SS1 No.6 ~ 10, 13,16 周溝覆土上層

第3表 第27号墳出土円筒埴輪観察表(第7図)

番号	器種	部位	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調④残存	ハケメ	調整・手法の特徴	備考
2	円筒	口縁部		①A：赤色粒子を多く含む ②良好・硬質③赤褐 5YR4/6 ④破片	板ナデ	口縁部はやや外反する。外面は板ナデ調整後ヨコナデ、内面はヨコナデ調整を施す。口唇部は面をなす。	SS1 No.12 周溝覆土上層
3	円筒	口縁部		①A：白色粒子を多く含む② 良好・硬質③橙 5YR6/8 ④ 破片	12本	口縁部は強く外反する。外面は弱いタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整を施す。口唇部は面をなす。	SS1 No.1 周溝覆土上層

2. 溝跡

溝跡は北区から11条検出された。南に傾斜する地形のためか、およそ北-南方向に調査区内を横断するものが多く認められる。

北東側の溝跡からは、少量の埴輪片が出土しているが、混入の可能性が高く、直接的に溝跡に関係するものではないであろう。

時期を決定できる遺物はなく、遺構の形成時期を決定することはできないが、多くは近世以降に掘削されたものと考えられる。

第1号溝跡(第8図)

第1号溝跡は、調査区南西側のD-1・2グリッドに位置し、北東-南西方向に延びている。南西側に向かって徐々に浅くなり、上面を削平されているためか約5.04mから南西側では検出不能となる。南側の立上りは調査区域外であるため全容は不明であるが、急角度な掘り込みは認められず、中心から緩やかな角度で立ち上がる。

調査区内における規模は、調査範囲で全長5.04m、幅0.78~1.48m、深さ0.11~0.17mを測り、遺構確認面からの掘り込みは浅い。

第2号溝跡(第8図)

第2号溝跡は、調査区南西側のD-1グリッドに位置し、北側は調査区域外へと延びている。P3と重複しているが、新旧関係は不明である。

調査区内における規模は、全長1.46m、幅0.32~0.38m、深さは0.11mを測る。平面形は逆L字形に屈曲し、調査区域外へ延びている。

第3号溝跡(第8図)

第3号溝跡は、調査区南西のD-1グリッドに位置し、第4号溝跡の北側に隣接する。

調査区内における規模は全長0.57m、幅0.2~0.23m、深さ0.25mを測る。全長、幅、深さともに非常に小規模であることから、溝跡とは考え難いが調査時の遺構番号を踏襲し溝跡とした。

第4号溝跡(第8図)

第4号溝跡は、調査区南西D-1グリッドに位置しており、第3号溝跡の南側に隣接している。

調査区内における規模は、全長1.62m、幅0.20~0.30m、深さ0.11mを測り、東西方向に掘削されている。

第5号溝跡（第8図）

第5号溝跡は、調査区南西のC・D-2グリッドに位置する。北東-南西方向に調査区を横断する。第27号墳、第6号土壙と重複しており、土壙よりも古い古墳よりは新しい時期に掘削されたと考えられる。掘り込みが非常に浅いことから、上面は既に削平されているのであろう。

南側の調査区際で大きく膨らんでおり、この付近で溝幅が広がるか、もしくは土壙状になっていたものと考えられる。この幅の広い部分は、他の箇所比べてやや掘り込みが深い。

規模は、検出した範囲で全長3.2m、幅0.34～0.46m、深さ0.08～0.12mを測り、南側の広がる部分の最大幅は1.32mになる。

第6号溝跡（第8図）

第6号溝跡は、調査区中央よりやや南西グリッドに位置する。北-南方向に調査区内を横断し、第27号墳の墳丘上に構築されている。第5号溝跡と同様に、南側の調査区際で溝幅が広がっており、こちらも南側から溝幅が広がっていたか、土壙状の掘り込みとなっていたことが考えられる。

規模は、検出した範囲で全長3.60m、幅0.46m、深さ0.14～0.19mを測り、南側の幅が広がる部分は、最大1.52mである。古墳の墳丘削平後に掘削されたものであろう。

第7号溝跡（第9・10図）

第7号溝跡は、調査区中央やや東よりのB・C-3グリッドに位置し、北西-南東方向に調査区内を横断するように直線的に延びる。

第27号墳の北東側に隣接しており、土層断面の観察から、周溝の一部を壊して掘削されていることが半明した。周溝覆土の下層部分を切り込んでいることから、周溝がほぼ埋没した段階に掘削されたものであろう。

検出部分における規模は、全長3.24m、幅2.54～2.80m、深さ0.46～0.60mの比較的大きなも

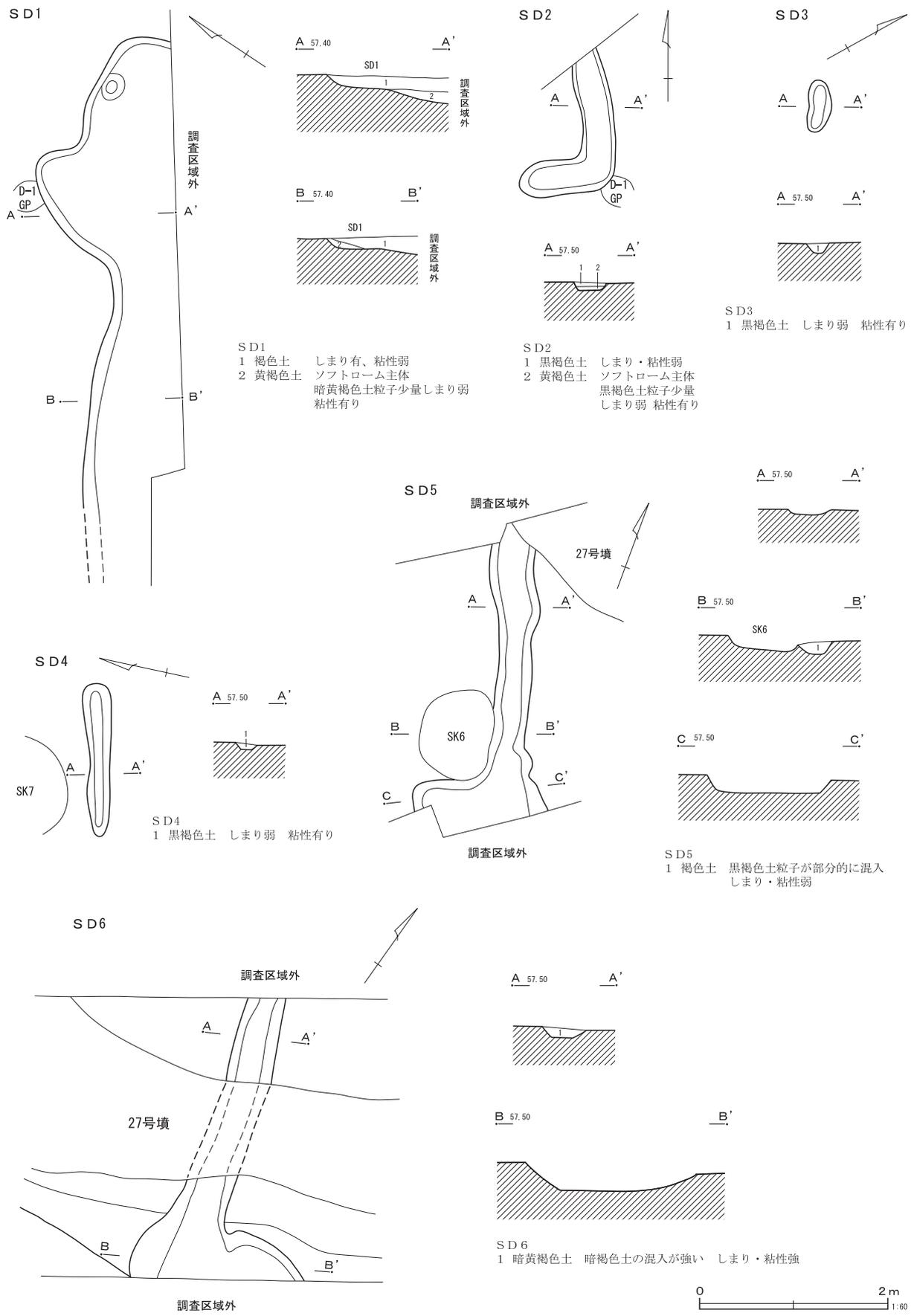
のである。断面形は溝底面の平らな逆U字形で、壁面の立ち上がりは緩やかである。覆土は概ね自然堆積で、黒褐色土及び暗褐色土を主体とし、最下層に灰白色土の堆積が薄く見られる。

また、溝底面には長径2.50m、短径1.85m、深さ0.70mを測る楕円形の土壙状の掘り込みが検出された。この土壙については、調査時における覆土の観察が十分でなく、溝の掘削に先行するものなのか、後から掘り込まれたものであるのか明確にすることができなかった。

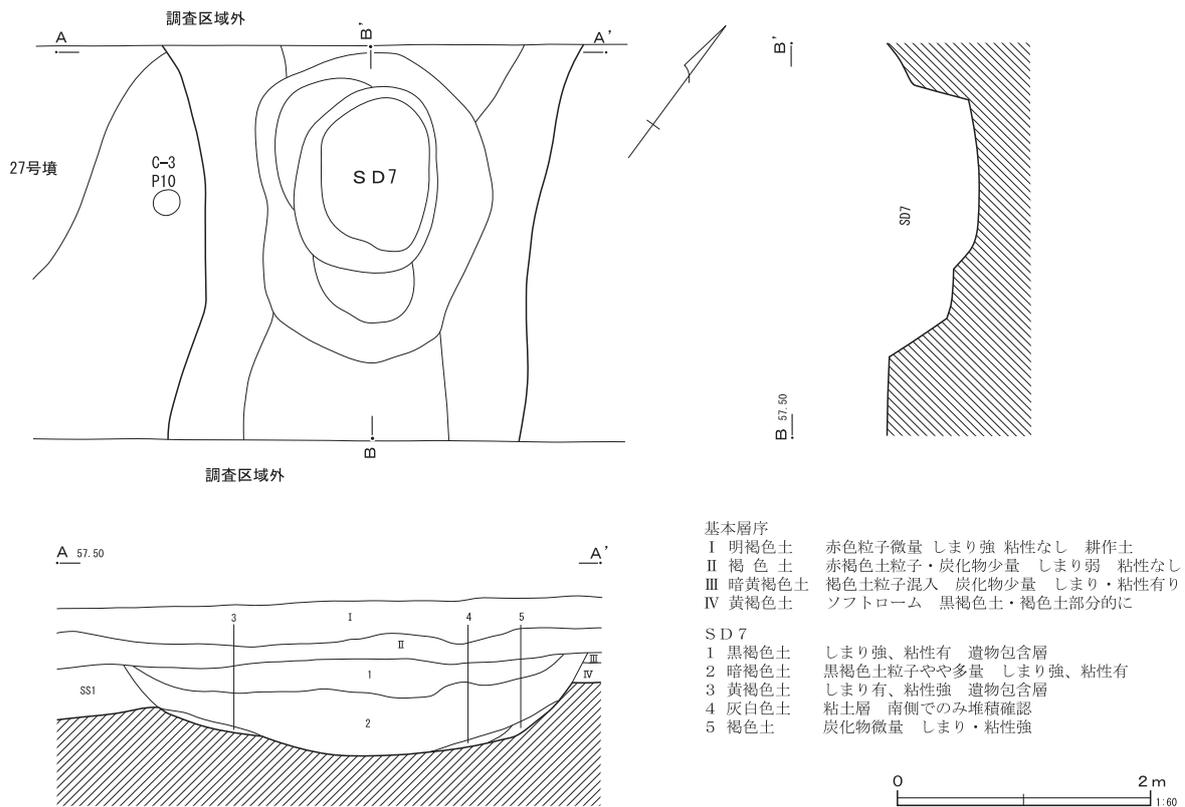
遺物は、覆土上層から面的な広がりをもって大量の埴輪片が出土した（第10図）。そのため古墳の周溝の可能性を考慮して調査を実施したが、第27号墳との重複関係や、調査区外へ直線的に延び、調査区内に対応するような溝跡が検出されていないこと、さらに調査区外にも古墳の所在を窺わせるような痕跡がないことなどを勘案すると、現状では古墳に伴う周溝の可能性は低いものと考えられる。しかし、後述するように出土した円筒埴輪や形象埴輪の特徴にある程度まとまりが見られることから、周辺に所在する古墳を壊した際に一括して廃棄されたものと推定される。

溝自体の掘削時期を示す良好な遺物は出土していないが、覆土中から近世の瀬戸美濃系の天目碗や皿の破片が出土していることから、近世段階まで下がる可能性も考えておきたい。

出土した埴輪は、円筒埴輪を主体に、馬・人物等の形象埴輪がある。円筒埴輪は二条突帯三段構成の完形品に近い破片が上面から出土している。形象埴輪は、馬形埴輪の破片が広範囲に分布し、これに少量の人物・家・不明などの器種が伴う。埴輪は、大半が覆土上面から約40cmの層厚の中に重なるように出土したが、少量であるが下層からも出土していることから、溝跡がある程度埋没した段階に土壙状の掘り込みを掘削し、その埋戻しの際に一括して廃棄されたものと解釈するのが自然であろう。



第8図 第1～6号溝跡



第9図 第7号溝跡

円筒埴輪 (第11・12図)

第7号溝跡から出土した円筒埴輪はすべて普通円筒に属するもので、朝顔形埴輪は含まれていない。前述したように、これらの埴輪群は古墳に伴って出土したものではなく、二次的に溝跡に廃棄された状態で出土している。現状では、一古墳に樹立されていた埴輪群が一括して廃棄された保障はなく、複数の古墳からの混入を否定できない。しかし、内外面調整、胎土、焼成、色調などの諸属性で共通性が認められ、比較的まとまりのある一群として把握される。ここでは資料的な限界性を認めながらも、まず全体的な特徴について説明し、その後で、分類を試みたい。

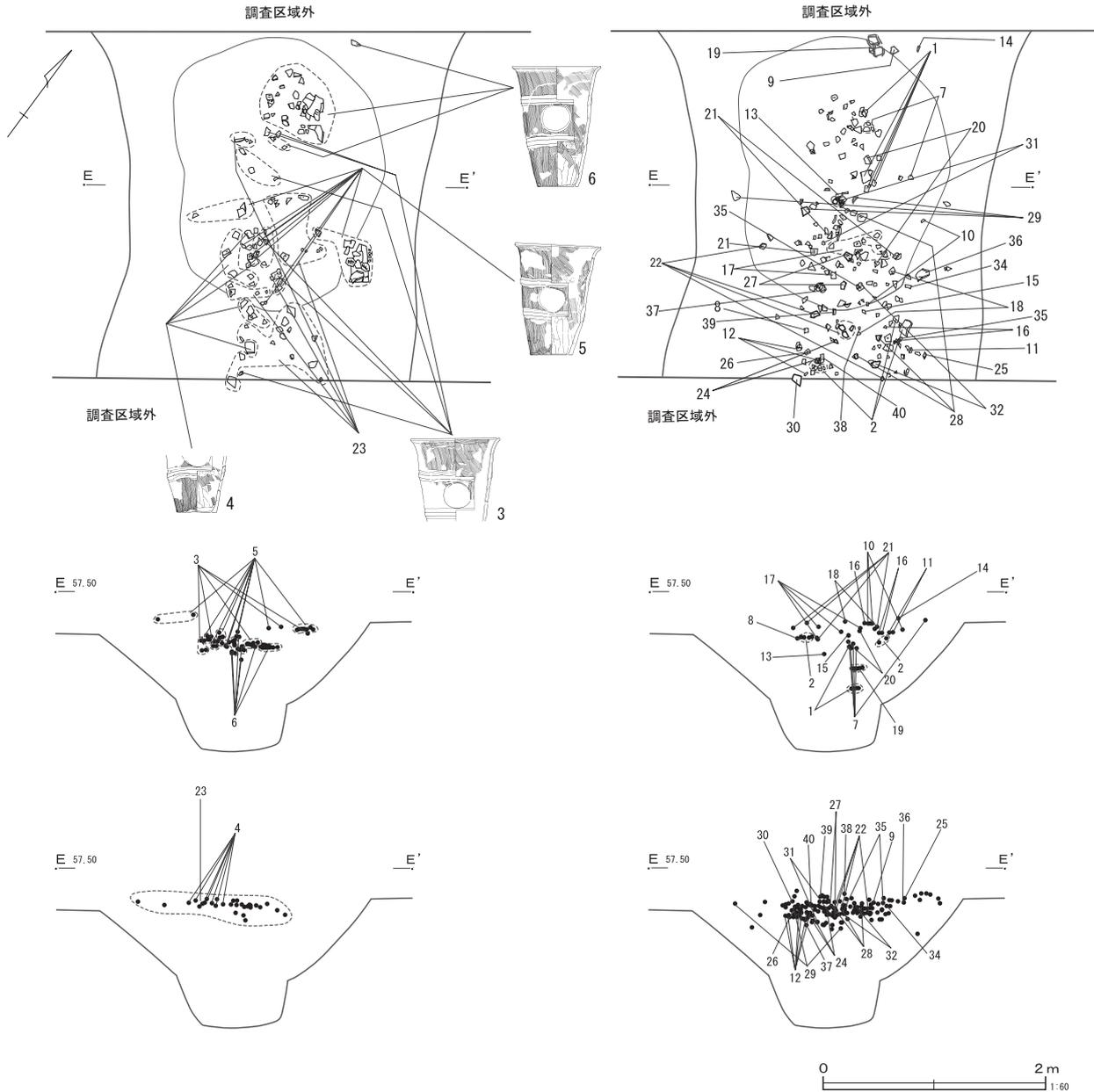
破片も含め、すべて二条突帯三段構成品によって限られている。全体の形のわかる5は口径25.5cm、器高33.4cm、底径12.6cm。6は復元口径26.0cm、器高36.0cm、底径12.1cmを測り、5の方が6より

も器高がやや低いだけで、他の部位については大差ない大きさである。

器形は、底部から一様に開きながら立ち上がり、口縁部で大きく外反する二条突帯円筒埴輪における基本形である。口唇部は端面をなし、浅くくぼむものが主体で、中には強いヨコナデによってつまみ出されたものや、端部が外を向き、ほぼ垂直に立つものなどバラエティが見られる。透孔は、第二段目に対向するように穿たれ径の比較的大きな円形を呈する。突帯は断面低M字形のものが目立つが、低台形もある。突帯の稜が鋭いのが特徴である。

外面調整はタテハケ調整を施し、第三段目でやや交差するようにタテハケ調整を施す。また、口縁部のヨコナデ調整も木口状工具の使用によって明確な条線を残すものや、あまり力を入れないため端部際までハケメが明瞭に残るものが目立つ。

内面調整は相対的に丁寧で、底部から中位にかけ



第10図 第7号溝跡遺物出土状況

てタテナデ調整を施した後、中位から口縁部にかけてナメハケ調整を施すものが多い。また、口縁部内面にヘラ記号を描くものも多く、その大半は「×」印と想定される。

底部の破片が少ないが、基部成形の分かるものは、幅4cm前後の粘土板を右回りに接合(R接合)している。なお、底部調整は基本的には認められない。

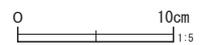
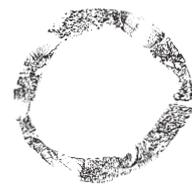
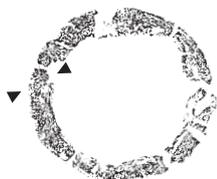
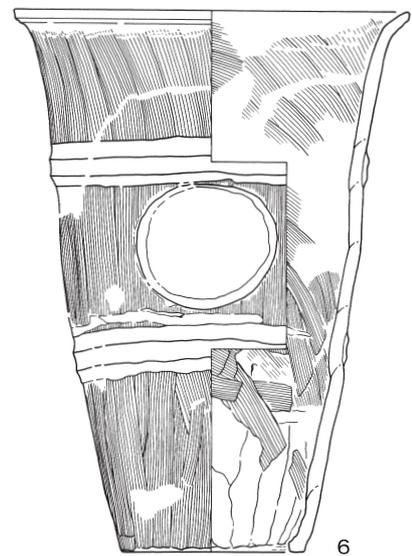
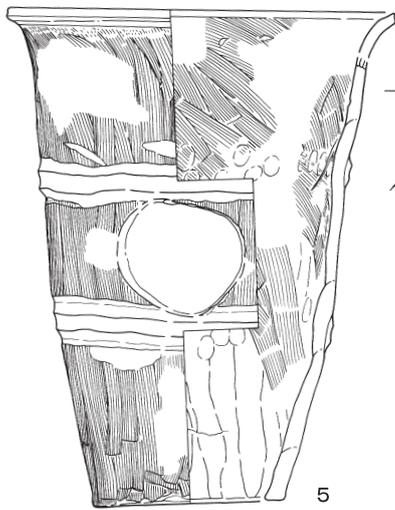
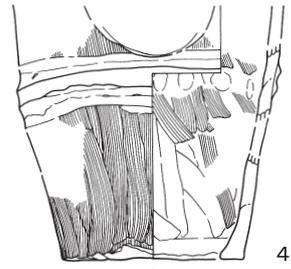
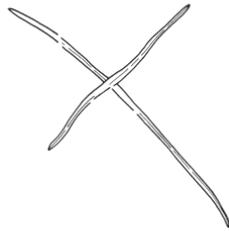
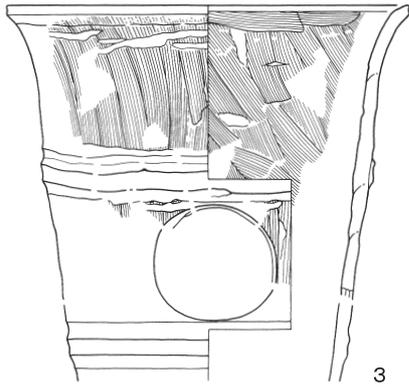
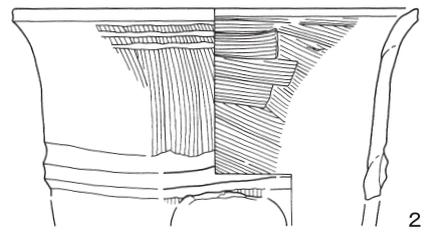
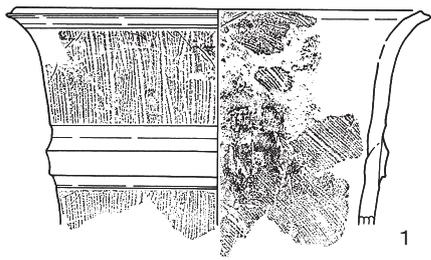
胎土は、角閃石、石英、白色粒子、赤色粒子、チャートなどの混入物を含むA類と、角閃石粒子

をほとんど含まないB類の2種類に大きく分けられる。焼成は窖窯焼成で、良好・硬質に焼き上げられているものが多い。色調は、赤褐色から暗赤褐色を基調とし、橙色も見られる。

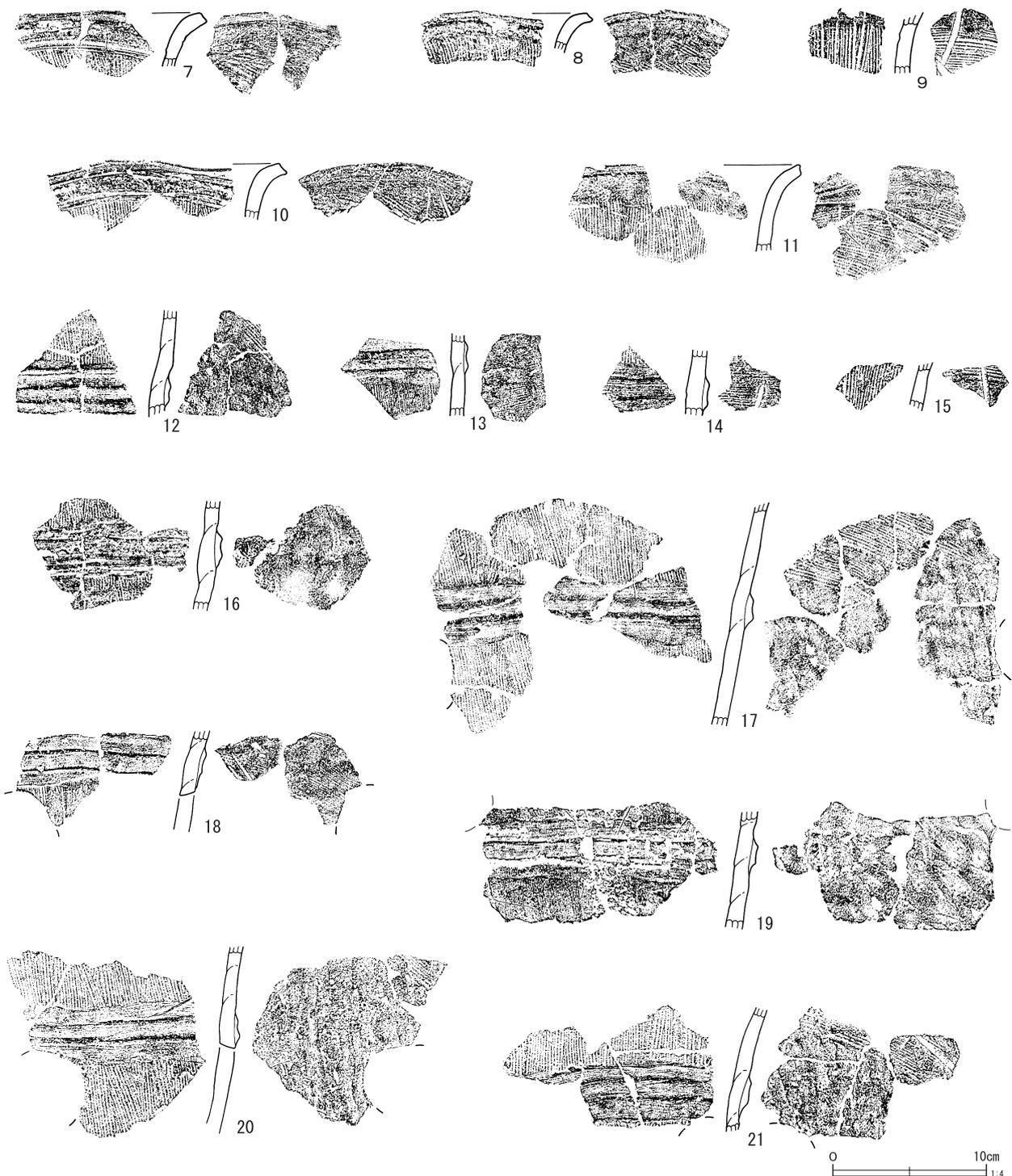
次に、分類について説明する。形態的特徴やハマメ、胎土、焼成から、以下の6類に分類される。

1類 (3~6・13・18)

口縁部は大きく外反し、口唇端部が外を向き、ほぼ垂直に立つ。突帯は稜の鋭い低M字形を呈する。



第 11 图 第 7 号沟迹出土円筒埴輪 (1)



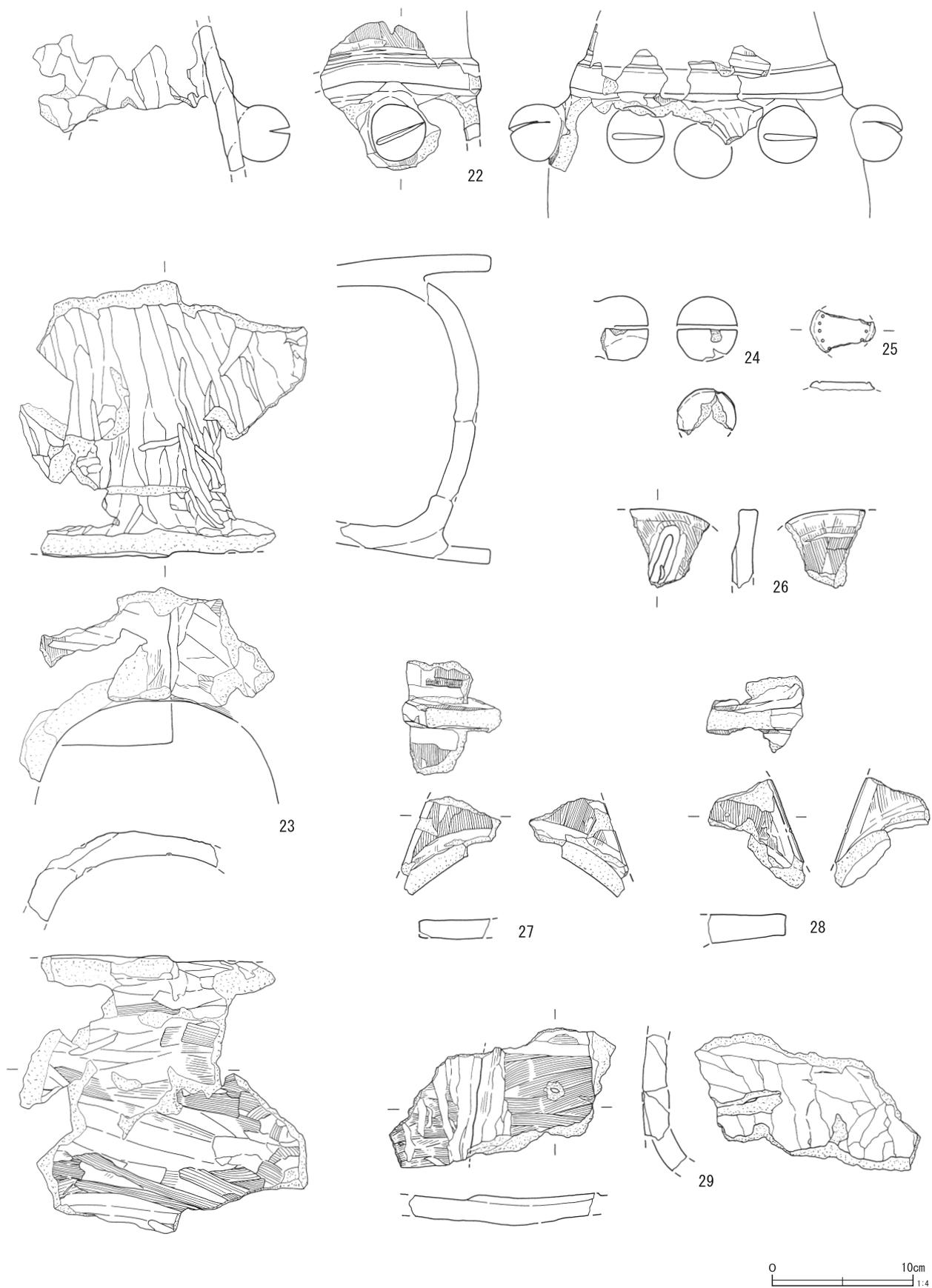
第12図 第7号溝跡出土円筒埴輪(2)

口縁部内面に大きく「×」印のヘラ記号を描く。ハケメは細かく、橙色で軟質な焼き上がりが目立つ。

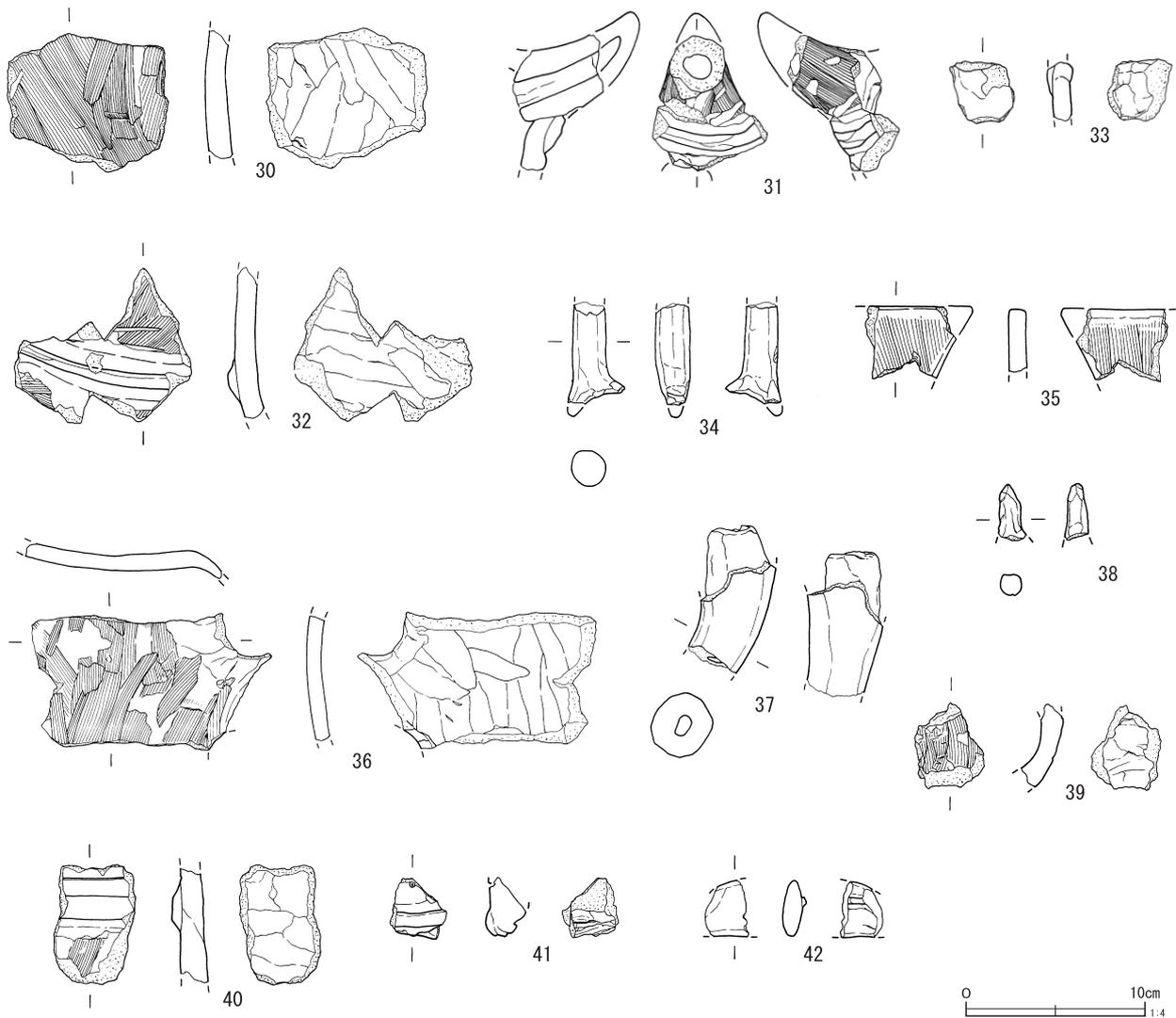
2類(2・11・16)

口縁部形態は、1類と同じで口唇端部を外を向き、

ほぼ垂直に立つ。突帯も稜の鋭い低M字形で類似する。相違点としては、ハケメが粗く均一的で、ハケメ工具が異なる。色調は暗赤褐色を基調とし、硬質な焼き上がりを示すものが多い。



第 13 图 第 7 号沟迹出土形象埴輪 (1)



第 14 図 第 7 号溝跡出土形象埴輪（2）

3類（1・9）

口縁部は大きく外反し、口唇部が強いヨコナデによって、つまみ出される。突帯は幅広の低M字形で、上稜は丸みをもつ。口縁部内面にヘラ記号を描く。ハケメは幅広の二条線が目立つ。

4類（7・10・14・15・17・20・21）

口縁部は端部で短く外反し、木口状工具によってヨコナデを施す。突帯は下稜のやや突出する低M字形である。外面調整は口縁部にやや交差するタテハケ調整を施し、内面調整はタテナデ調整後、中位から口縁部にかけてナナメハケ調整を施す。口縁部内

面にヘラ記号が描かれ、ハケメは2cmあたり11～12本とやや粗い。

5類（8・12）

4類に類似しているが、突帯の幅がやや狭い低M字形を呈する。口縁部は端部で短く外反し、器厚が薄い。

6類（19）

外面調整に板ナデ調整を施し、突帯は稜の鋭い断面低台形を呈する。内面に粘土紐痕を明瞭に残し、胎土に凝灰岩粒子を混入する。1点のみで、客体的なあり方を示す。

第4表 第7号溝跡出土円筒埴輪観察表(1)(第11・12図)

番号	器種	部位	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調④残存	ハケメ	調整・手法の特徴	備考
1	円筒 (3類)	中位～ 口縁部	口径 (27.8) 残高 [14.3] 三段高 10.4	①B ②良好・硬質 ③赤褐 2.5YR4/6 ④1/5 残存	10本	口縁部は大きく外反する。外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整。口縁部のヨコナデ調整は沈線状。口唇部は端面をなし、強くくぼむ。突帯は低M字形で、突出の高さは約5mmである。上稜は丸みをもつ。	No.262,264 内面にヘラ記号の一部が残る
2	円筒 (2類)	中位～ 口縁部	口径 (26.7) 残高 [13.1] 三段高 10.8	①A：砂粒を多く含む ②良好・硬質 ③暗赤褐 2.5YR3/6 ④1/5 残存	11本	口縁部は大きく外反する。外面はタテハケ調整、内面はナナメハケ調整を施す。口縁部のヨコナデ調整はやや弱い。口唇部はややくぼみ外を向く。突帯は低M字形で、突出の高さは約5mmである。上下稜とも明瞭。	No.42,43,96
3	円筒 (1類)	中位～ 口縁部	口径 (26.4) 残高 [19.5] 三段高 11.0	①A ②良好・硬質 ③暗赤褐 5YR3/6 ④1/2 残存	15本	口縁部は大きく外反する。外面はタテハケ調整で、内面は体部にナナメハケ調整、口縁部にヨコハケ調整を施す。口縁部のヨコナデ調整はやや弱い。口唇部はややくぼみ外を向く。突帯は低M字形で、突出の高さは約3mmである。上下稜とも明瞭で鋭い。二段目に円形の透孔が穿孔される。	No.141,144,167, 200,208,212,215, 229,231,232,233, 234,235,241,259, 268,277,282 内面ヘラ記号「×」
4	円筒 (1類)	底部～ 中位	器高 [15.7] 底径 12.0 一段高 12.3	①A ②良好・硬質 ③明赤褐 5YR5/8 ④2/3 残存	15本	底部は幅3.7cmの粘土板をR接合して成形。二段目に円形の透孔が穿孔される。外面はタテハケ調整で、内面はタテナデ調整の後にナナメハケ調整を施す。突帯は低M字形で、突出の高さは約4mmである。上下稜とも明瞭で鋭い。突帯下端の貼付はやや粗雑。	No.81,83,89,103, 107,111,112,113, 120,123,124,172
5	円筒 (1類)	底部～ 口縁部	口径 25.5 器高 33.4 底径 12.6 一段高 12.4 二段高 9.5 三段高 11.5	①A ②普通・普通 ③橙 7.5YR6/6 ④口縁部を1/5欠損	16本	口縁部は大きく外反する。外面はタテハケ調整で、内面は体部にタテナデ調整後、ナナメハケ調整を施し、口縁部にヨコハケ調整を施す。口縁部のヨコナデ調整はやや弱い。口唇部はややくぼみ外を向く。突帯は低M字形で、突出の高さは3～5mmである。上下稜とも明瞭で鋭い。二段目に円形の透孔が突帯間に穿孔される。底部は幅3.5cmの粘土板をR接合して成形する。	No.5,11,85,91,131, 178,179,188,193, 194,195,196,197, 202,210,254,255 内面ヘラ記号「×」
6	円筒 (1類)	底部～ 口縁部	口径 (26.0) 器高 36.0 底径 12.1 一段高 13.5 二段高 12.2 三段高 10.3	①A ②普通・普通 ③赤褐 5YR4/8 ④中位から口縁部にかけて1/2欠損	15本	口縁部は大きく外反する。外面はタテハケ調整で、内面は体部にタテナデ調整後、ナナメハケ調整を施し、口縁部にヨコハケ調整を施す。口縁部のヨコナデ調整はやや弱い。口唇部はややくぼみ外を向く。突帯は低M字形で、突出の高さは3～5mmと低い。上下稜とも明瞭で鋭いが、下端のナデつけは粗雑である。二段目に円形の透孔が段間の上寄りに大きく穿孔される。底部は幅4.5cmの粘土板を接合して成形する。	No.148,157,158, 214,217,228,266, 269,272,275 内面にヘラ記号の一部が残る
7	円筒 (4類)	口縁部		①B：角閃石を多く含む ②良好・硬質 ③赤褐 5YR4/8 ④破片	11本	口縁部は大きく外反する。外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整を施す。口縁部のヨコナデ調整は沈線状。口唇部は端面をなし、浅くくぼむ。	No.1,157 内面にヘラ記号の一部が残る
8	円筒 (5類)	口縁部		①B：角閃石を多く含む ②不良・軟質 ③明赤褐 5YR5/8 ④破片	12本	口縁部は大きく外反する。外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整を施す。口縁部のヨコナデ調整はやや弱い。口唇部は端面をなし、浅くくぼむ。	No.170
9	円筒 (3類)	体部		①A：白色粒子を多く含む ②良好・硬質③赤褐 5YR4/6 ④破片	11本	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整を施す。	No.238 内面にヘラ記号「×」の一部が残る
10	円筒 (4類)	口縁部		①A ②良好・硬質 ③赤褐 5YR4/8 ④破片	12本	口縁部は大きく外反する。外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整を施す。口縁部のヨコナデ調整は沈線状。口唇部は端面をなし、浅くくぼむ。	No.2,39 内面にヘラ記号の一部が残る
11	円筒 (2類)	口縁部		①B：角閃石を多く含む ②良好・硬質 ③暗赤褐 2.5YR3/6 ④破片	12本	口縁部は大きく外反する。外面はやや交差するタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整を施す。口縁部のヨコナデ調整はやや弱い。口唇部は端面をなす。	No.52,247
12	円筒 (5類)	体部		①B②普通・軟質 ③明赤褐 5YR5/8 ④破片	11本	外面はタテハケ調整、内面はナデ調整の後にナナメハケ調整。突帯は低M字形で、突出の高さは約4mmである。上下稜とも明瞭。	No.96,167,169

第5表 第7号溝跡出土円筒埴輪観察表(2)(第12図)

番号	器種	部位	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調④残存	ハケメ	調整・手法の特徴	備考
13	円筒 (1類)	体部		①A:砂粒を多く含む ②普通・軟質③明赤褐 5YR5/8 ④破片	15本	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整を施す。突帯は低M字形で、突出の高さは約3mmである。上下稜とも明瞭で、ナデつけが強い。	No.261
14	円筒 (4類)	体部		①A②良好・硬質 ③赤褐 5YR4/6 ④破片	12本	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整を施す。突帯は低M字形で、突出の高さは約4mmである。上下稜とも明瞭。	No.240 内面にヘラ記号の一部が残る
15	円筒 (4類)	体部		①A:砂粒を多く含む ②良好・硬質③赤褐 5YR4/8 ④破片	12本	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整を施す。	No.71 内面にヘラ記号の一部が残る
16	円筒 (2類)	体部		①A②良好・硬質 ③暗赤褐 5YR3/6 ④破片	12本	外面はタテハケ調整で、内面は縦方向のナデ調整を施す。突帯は低M字形で、突出の高さは約4mmである。上下稜とも明瞭で、突帯下端は棒状工具によるナデつけか。	No.45,51
17	円筒 (4類)	体部		①B:小礫を多く含む ②良好・硬質③赤褐 5YR4/8 ④破片	12本	外面はやや交差するタテハケ調整で、内面は縦方向のナデ調整の後ナナメハケ調整を施す。突帯は下稜のやや突出する低M字形、突出の高さは約5mmである。稜はやや丸みをもつ。	No.9,12,20,25,29, 30,110,183 透孔が一部残る
18	円筒 (1類)	体部		①B②良好・硬質 ③赤褐 5YR4/6 ④破片	15本	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整を施す。突帯は低M字形で、突出の高さは約3mmである。上下稜とも明瞭で、ナデつけが強い。	No.19,69 透孔が一部残る
19	円筒 (6類)	体部		①A:凝灰岩を含む ②良好・硬質③明赤褐 5YR5/6 ④破片	板ナデ	外面は板ナデ調整で、内面は斜め方向のナデ調整を施す。突帯は低台形で、突出の高さは約5mmである。上下稜とも明瞭で鋭い。内面に粘土紐痕を明瞭に残す。	No.278 透孔が一部残る
20	円筒 (4類)	体部		①B:砂粒を多く含む ②良好・硬質③赤褐 5YR4/8 ④破片	11本	外面はやや交差するタテハケ調整で、内面はタテナデ調整の後ナナメハケ調整を施す。突帯は下稜のやや突出する低M字形で、突出の高さは約4mmである。稜はやや丸みをもつ。	No.153,21 透孔が一部残る
21	円筒 (4類)	体部		①B②良好・硬質 ③暗赤褐 5YR3/6 ④破片	11本	外面はやや交差するタテハケ調整で、内面はタテナデ調整の後ナナメハケ調整。突帯は下稜のやや突出する低M字形で、突出の高さは約4mmである。稜はやや丸みをもつ。	No.7,117,186,256 内面にヘラ記号の一部が残る 透孔が一部残る

第6表 第7号溝跡出土形象埴輪観察表(1)(第13図)

番号	器種	部位	①胎土②焼成③色調④残存	ハケメ	調整・手法の特徴	備考
22	馬	胸繫	①B②良好・硬質③暗赤褐 2.5YR3/6 ④胸繫周辺の破片	13本	幅広の突帯の胸繫に4個の鈴を貼付し、胸の中央に円形の透孔を穿孔する。外面はタテハケおよびナデ、内面は不定方向のナデ。鈴は表面をナデ、鈴口は鋭利な工具による横位の切りこみ。	No.24,59,70,75,76, 129
23	馬	腹部	①B②良好・硬質③暗赤褐 2.5YR3/6 ④障泥から腹部にか けての破片	14本	外面はハケおよびナデ、内面は横位のナデを施した後棒状工具による粗いナデを加える。亀裂を防ぐための補修痕であろう。障泥は粘土板を貼付して成形する。	No.33,72,73,82,87, 88,90,94,100,105, 106,130,140,142
24	馬	鈴	①B:白色粒子を多く含む ②良好・硬質③暗赤褐 2.5YR3/6 ④鈴の破片		外面はナデ。鈴口は鋭利な工具による横位の切りこみ。胸繫に取り付けられていたと考えられる。	No.77,97
25	馬	鏡板	①B②普通・普通③明赤褐 2.5YR5/6 ④鏡板または杏葉か		外面はナデ、裏面に剥離痕を残す。楕円形の板状破片。周縁部に丸棒状の工具による円形の刺突が巡る。	No.54
26	馬	後輪	①B②良好・硬質③暗赤褐 2.5YR3/6 ④鞍の後輪の破片	14本	前後面ハケ、端部ナデ。後面は突帯を斜めに貼付し、尻繫を表現する。	No.92
27	馬	前輪	①B②良好・硬質③暗赤褐 2.5YR3/6 ④鞍の前輪の破片	15本	前後面ハケ、端部ナデ。内面はナデを施す。	No.31,34
28	馬	前輪	①B:赤色粒子を多く含む ②良好・硬質③暗赤褐 2.5YR3/6 ④鞍の前輪の破片	15本	前後面ハケ、端部ナデ。内面はナデを施す。	No.46,66,133
番号	器種	部位	①胎土②焼成③色調④残存	ハケメ	調整・手法の特徴	備考

第7表 第7号溝跡出土形象埴輪観察表(2)(第14図)

番号	器種	部位	①胎土②焼成③色調④残存	ハケメ	調整・手法の特徴	備考
29	馬	障泥	①B:赤色粒子を多く含む ②良好・硬質③暗赤褐 2.5YR3/6 ④障泥付近の破片	14本	外面はハケおよびナデ、内面は不定方向のナデを施す。障泥は粘土板を貼付して成形する。	No.126,132,207
30	馬	体部	①B:白色粒子を多く含む ②良好・硬質③暗赤褐 2.5YR3/6 ④体部の破片	16本	外面はハケ、内面はナデを施す。	No.95
31	馬	尻尾	①B:赤色粒子を多く含む ②良好・硬質③赤褐 2.5YR4/6 ④尻尾の破片	16本	外面ハケおよびナデ、内面ナデ。尻尾の付け根に接するように尻繫を巡らし、円形の透孔を穿孔する。中空の尻尾で、先端を欠損する。	No.116,206
32	馬	胸繫	①B:白色粒子を多く含む ②良好・硬質③赤褐 2.5YR4/6 ④胸繫付近の破片	16本	外面はハケおよびナデ、内面は横位のナデを施す。外面に横位の突帯を貼付し、胸繫を表現する。	No.35,61
33	人物	顔	①B②良好・硬質③暗赤褐 2.5YR3/6 ④顔の一部か		外面は丁寧なナデ、内面はナデを施す。外面には剥離痕が見られる。	表採
34	人物	男子 美豆良	①B②良好・硬質 ③暗赤褐 2.5YR3/6 ④男子の下げ美豆良の破片		粘土紐成形の棒状の美豆良。先端部がT字形に分かれる。断面円形。外面はタテナデを丁寧に施す。	No.16
35	人物	女子 島田髻	①B②良好・硬質③赤褐 5YR4/6 ④女子の島田髻の破片	14本	表面はハケ後、端部にナデを施す。粘土板成形の撥形を呈する島田髻。	No.50,177
36	人物	胸部	①B②良好・硬質 ③赤褐 2.5YR4/6 ④胸から左腕の付け根の破片	14本	外面はタテハケ後、左腕付け根付近にナデを施す。内面は丁寧なナデ。	No.6
37	人物	腕部	①B②良好・硬質③赤褐 5YR4/6 ④上腕部の破片		木芯中空技法。表面はタテナデを施す。	No.175
38	人物	拇指	①B②良好・硬質③赤褐 2.5YR4/6 ④拇指の破片		表面にナデを施す。	No.68
39	人物	頸部	①B②良好・硬質③赤褐 2.5YR4/6 ④頸部の破片	14本	外面ハケ、内面横位のナデ。	No.86
40	家	壁体部	①B:小礫を多く含む②良好・硬質③暗赤褐 2.5YR3/6 ④壁体部の破片	16本	外面ハケおよびナデ、突帯部分はヨコナデ。内面は横位のナデ。	No.163
41	不明		①B②良好・硬質③赤褐 2.5YR4/6 ④破片		外面はナデ、内面に剥離痕を残す。外面は周縁に突帯を巡らし、丸棒状の工具による円形刺突がある。	No.58
42	不明		①B②良好・硬質 ③赤褐 2.5YR4/6 ④破片		外面はナデ、内面は横位の小さな突帯がつく。	一括

形象埴輪(第13・14図)

形象埴輪は、馬(22～32)、人物(33～39)、家(40)、不明(41・42)等の破片がある。胎土は円筒埴輪と同じで、色調は赤褐色から暗褐色を基調とする。ハケメは2cmあたり14～16本と細かく、円筒埴輪の1類に類似したハケメである。

馬形埴輪は、直接接合関係は認められないが、胎土・焼成・色調・ハケメ等の特徴から一部を除いて大半が同一個体と判断される。全体として小型の馬を想定させる破片が多い。

22は、馬の胸繫部分の破片である。胸繫を表現した幅広の突帯に4個の鈴を左右に均等に配置したものと復元され、鈴は1個のみが残り、胸の中央には円形の透孔が穿たれる。透孔の切り取り面は丁寧にナデが施され、角を丸く仕上げる。鈴は表面をナ

デ、鈴口は鋭利な工具によって横位に切り込まれている。24の鈴も一部しか残っていないが、本来は胸繫もしくは尻繫に貼付されていたのであろう。23は、馬の腹部の破片である。前脚の付け根付近から後脚にかけて残す。左側面の前脚寄りには障泥の一部が残り、反対側の右側の障泥が29にあたる。腹部は、前脚と後脚を繋ぐ粘土帯によってアーチ状に成形されたものであるが、外面をハケおよびナデ、内面を横位のナデによって丁寧に整形痕をナデ消しているため詳細は不明である。内面の後脚付け根付近には亀裂部分を補修した棒状工具による乱雑なナデ付け痕が残されている。25は楕円形を呈する板状の破片である。周縁には丸棒による連続する円形刺突文が巡り、裏面に剥離面を残す。その形状や大きさから轡の鏡板、もしくは胸繫や尻繫に垂下され

た杏葉の一部とも考えられる。

26～28は馬の鞍の破片である。26は後輪の破片で、両面にハケを施し、後面には尻繫に繋がる革帯を表現した突帯が貼付されている。27・28は台形をした前輪の破片である。馬の体部に粘土板を貼付する。両面にハケを施し、周縁部にナデを加える。29は鞍の障泥の破片である。馬の体部に粘土板を貼付し、下端は体部から独立する形態であろう。側縁を入念にナデ付けているが、鐙等の表現は見られない。30は馬の体部の破片であるが、詳しい部位は不明である。31は粘土紐を巻き上げて成形された中空の馬の尻尾である。尻尾の下側には尻繫の革帯を表現した突帯が巡り、それに接して透孔が突帯貼付後、穿孔されている。透孔の切り取り面を強くナデ、角に丸みをもつ。32は鞍側の胸繫を表現したと考えられる体部の破片である。外面はナメハケ、内面は横位のナデを施す。

33から39は人物埴輪の破片で、複数個体の破片を含んでいる。33は顔面の一部と考えられる小片である。表面に確実でないが美豆良と考えられる剥離痕が残る。34は男子の下げ美豆良である。粘土紐成形によって棒状に形作られ、端部はT字形に短くつまみ出す。35は女子の島田髻の一部である。撥形を呈すると推測される。粘土板成形で作られ、両面にハケが施され、端部にナデを施す。36は人物の胸部の破片である。粘土紐成形で、外面はタテハケ後、左腕の付け根付近に指ナデを施す。内面は全体にナデを丁寧に施す。37は木芯中空技法によって成形された腕の付け根から挿入部にかけての破片である。外面は丁寧にタテナデを施す。38は粘土塊成形による拇指であろうか。全体に調整は雑に仕上げられている。39は人物の頸部と考えられる。外面はタテハケ、内面は横位のナデを施す。

40は家形埴輪の壁体部分と考えられる板状の破片である。部材を表現する横位の突帯が貼付される。外面はハケ、内面はナデを施す。

41・42は器種不明の破片である。41は周縁に

突帯を巡らし、その内側に25と同じ丸棒による円形刺突が見られる。馬具の一部であろうか。42は本体から剥離した破片である。剥離痕はあまり明確でない。表面はナデ、裏面は横位の突線状の張り出しがある。

第8号溝跡（第15図）

第8号溝跡は、調査区北東側のB-3・4グリッドに位置する。北西-南東方向に調査区を貫いているため全容は明らかでないが、西側約3mに位置する第7号溝跡にほぼ平行している。

検出された規模は、全長3.06m、幅1.52～2.61m、深さ0.14～0.39mで、掘り込みが浅い。

東側が底面から角度を持って立ち上がることに對し、西側ではテラス状の段を有す。現状で確認する術はないが、西側は掘り直しが行われている可能性も想定することができる。

第9号溝跡（第15図）

第9号溝跡は調査区北東のB-4グリッドに位置しており、北東-南西方向に調査区を横断している。第12・13号土壇と重複が認められ、それらよりも古いと考えられる。ただし、第13号土壇については立ち上がりを共有していることから、本溝跡の影響を受けていることは明らかであり、関連のある遺構の可能性も考えられる。

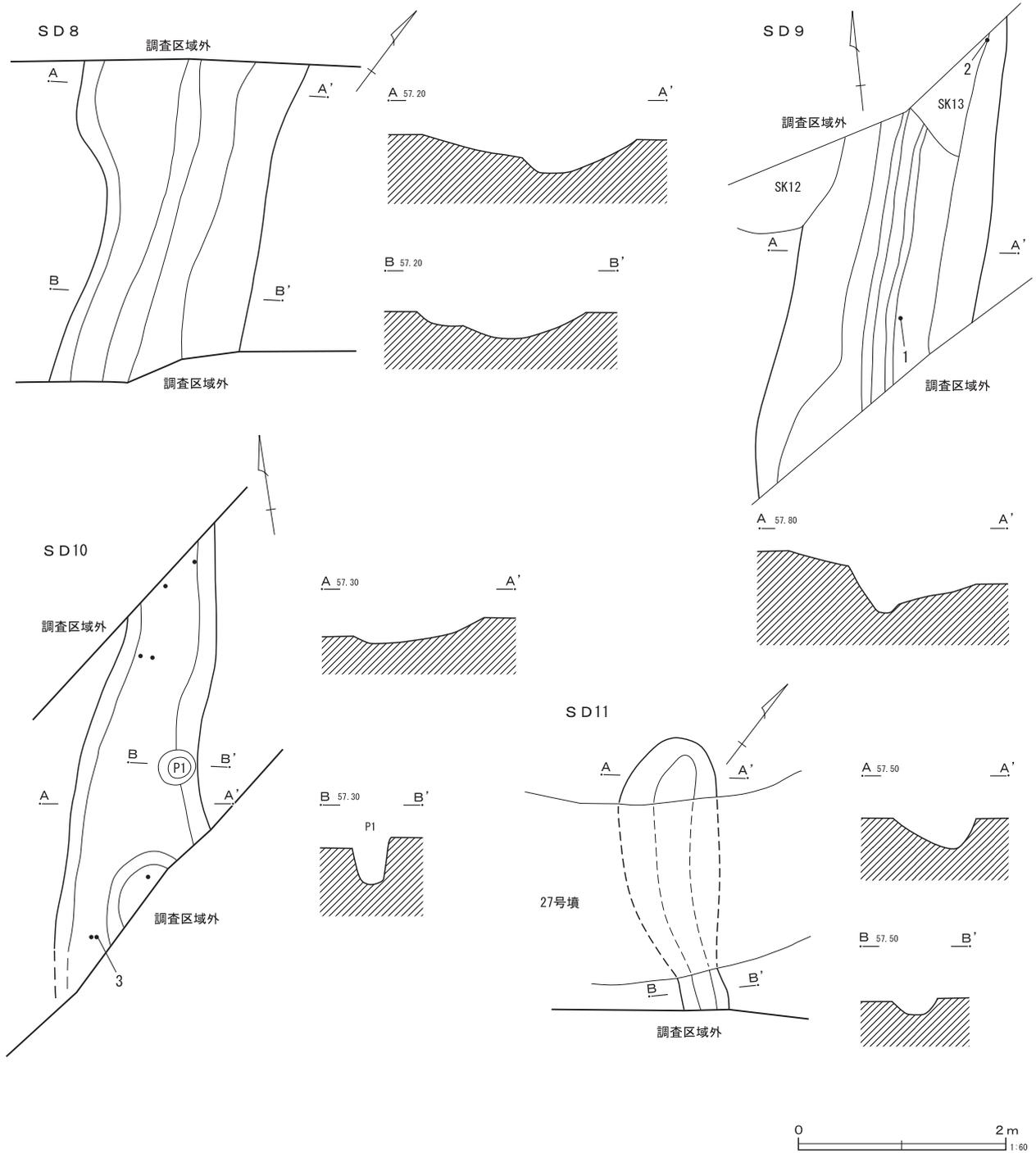
検出範囲における規模は、全長2.88m、幅1.80m、深さ0.56～0.62mを測る。西側は、比較的しっかりと掘り込みが確認されるが、東側は底面から緩やかな立ち上がりを見せ、明確ではない。

遺物は覆土上層から少量の円筒埴輪の破片が出土した（第16図）。

第10号溝跡（第15図）

第10号溝跡は、調査区北東のA・B-5グリッドに位置しており、第9号溝跡とほぼ並行している。検出範囲における規模は、長さ1.62m、幅0.84～1.25m、深さ0.17mを測る。

遺物は覆土上層から円筒埴輪の破片が少量出土した（第16図）。3は普通円筒埴輪の体部片である。



第15図 第8～11号溝跡

外面板ナデ調整の突帯付近の破片である。布を用いたと考えられる条線状の突帯ナデ付痕が認められる。

第11号溝跡 (第15図)

第11号溝跡は、調査区中央からやや南西側の第C-2・3グリッドに位置し、第27号墳と重複している。中央部分は、第27号墳の掘り下げで削平

してしまったため、新旧関係及は不明であるが、周囲の状況からは古墳よりも古い年代を求めるのは難しいであろう。墳丘が削平されて以降に掘削されたと考える方が無難であると考えられる。

規模は、全長1.62m、幅0.44～0.80m、深さ0.14～0.28mを測る。



第16図 第9・10号溝跡出土円筒埴輪

第8表 第9・10号溝跡出土円筒埴輪観察表(第16図)

番号	器種	部位	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調④残存	ハケメ	調整・手法の特徴	備考
1	朝顔	頸部	頸部径(12.5)	①A②良好・硬質③赤褐5YR4/8④1/3残存	板ナデ	外面は粗いたテハケに近い板ナデ調整、内面は横位のヘラナデ調整を施す。頸部の突帯は三角形で、突出の高さは約10mmである。突帯のナデつけはやや粗雑。	第9号溝跡No.1 覆土上層
2	円筒	口縁部		①A②良好・硬質③赤褐5YR4/8④破片	12本	外面はタテハケ調整後ヨコナデ調整、内面はナメハケ調整後ヨコハケ調整を施す。口唇端部を強くナデ、くぼむ。器肉が厚いことから、大型円筒の可能性あり。	第9号溝跡No.2 覆土上層 内面にヘラ記号の一部を残す
3	円筒	体部		①A②良好・硬質③橙7.5YR6/6④破片	板ナデ	外面は縦位の板ナデ調整、内面は斜位の板ナデ調整を施す。突帯は布を用いてヨコナデを施すため条線状の痕跡を明瞭に残す。	第10号溝跡No.6 覆土上層

3. 土壌

土壌は東区から3基、北区から10基検出された。時期を推定することができる遺物の出土はないが、溝跡との重複関係からいずれも古墳時代までに遡る遺構ではないであろう。

第1号土壌(第17図)

第1号土壌は、東区のB-6グリッドに位置する。平面形は円形を呈しており、規模は長軸長1.0m、短軸長0.96m、深さ0.2mを測る。長軸方位N-33°-Wを指す。

第2号土壌(第17図)

第2号土壌は、東区北東側B-6グリッドに位置する。南側は、調査区域外へと及んでおり、遺構の全容は明らかにならないが、現状をみる限りでは平面形は不整楕円形であると考えられる。

検出範囲における規模は、長軸長0.63m、短軸長0.42m、深さ0.1mを測り、長軸方位はN-7°-Eを指す。

第3号土壌(第17図)

第3号土壌は、東区ほぼ中央のB-6グリッドに位置する。平面形は、北側が狭い楕円形を呈し

幅が狭い箇所は掘り込みも浅くなっている。

規模は、長軸長0.76m、短軸長0.51m、深さ0.15mを測る。長軸方位は、N-26°-Eを指す。

第4号土壌(第17図)

第4号土壌は、北区南西側のD-1・2グリッドに位置する。

平面形は楕円形に近い円形で、規模は長軸長0.36m、短軸長0.33m、深さ0.15mを測り、長軸方位はN-59°-Eを指す。

第5号土壌(第17図)

第5号土壌は、北区南西側のC-2グリッドに位置し、第5号ピットと重複し、第6号土壌と隣接しているが、おそらく遺構確認面の上面で第6号土壌とは切り合っていたであろう。

平面形は楕円形である。規模は長軸長1.38m、短軸長0.94m、深さ0.19mを測り、長軸方位はN-48°-Wを指す。

第6号土壌(第17図)

第6号土壌は、北区南西側のC・D-2グリッドに位置し、第5号土壌の東側に隣接するが現状

での重複関係は確認できない。第5号溝跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

規模は、長軸長 0.96 m、短軸長 0.76 m、深さ 0.14 mを測り、長軸方位はN-3°-Eを指す。

第7号土壌 (第17図)

第7号土壌は、北区南西端のD-1号グリッドに位置する。調査区域外に及ぶため、平面形は不明だが、楕円形に近い不定形を呈すと考えられる。

検出範囲における規模は、南北軸長 1.55 m、東西軸長 0.92 m、深さ 0.26 mを測り、東西軸方位はN-57°-Eを指す。

第8号土壌 (第17図)

第8号土壌は、北区中央やや北東側のB-3グリッドに位置し、北側は調査区域外に及ぶため全容は不明である。平面形は、検出範囲の形状から、楕円形を呈すものと考えられる。

検出範囲における規模は、現状で長軸長 1.55 m、短軸長 0.92 m、深さ 0.06 m、ピット状の掘り込み箇所は 0.30 mを測り、東西軸方位はN-55°-Eを指す。

第9号土壌 (第17図)

第9号土壌は、北区中央から北東側のB-3グリッドに位置する。

平面形は、楕円形を呈す。

規模は、現状で長軸長 0.65 m、短軸長 0.48 m、深さ 0.25 mを測り、東西軸方位はN-89°-Eを測る。

第10号土壌 (第17図)

第10号土壌は、北区中央やや東側のC-3グリッドに位置し、南側は調査区域外へと及び、全容は不明であるが楕円形を呈すと考えられる。

検出範囲における規模は、現状で東西軸長 0.92 m、南北軸長 0.48 m、深さ 0.19 mを測り、東西軸方位はN-52°-Eを指す。

第11号土壌 (第17図)

第11号土壌は、北区北東側のB-4グリッドに位置し、北側は調査区域外に及ぶため全容は不

明である。また、第12号土壌との重複関係が認められ、土層断面の観察結果からは、第11号土壌の方が古いと考えられる。

平面形は、周囲の土壌と検出した範囲で推測すると楕円形である可能性が高いものと思われるが現状では不明である。

検出範囲における規模は、東西軸長 0.98 m、短軸長 0.37 m、深さ 0.13 mを測り、東西軸方位はN-65°-Eを指す。

第12号土壌 (第17図)

第12号土壌は、北区北東側のB-4グリッドに位置し、北側は調査区の制限によって検出することができなかった。また、第11号土壌と重複関係が認められ、土層断面の観察結果から、第12号土壌の方が新しいと考えられる。

平面形は、検出した範囲から推測すると、不整形ないしは楕円形を呈すものと思われる。

規模は、現状で長軸長 1.45 m、短軸長 0.68 m、深さは掘り込み面から 0.42 m、遺構確認面から 0.3 mを測り、長軸方位はN-65°-Eを指す。

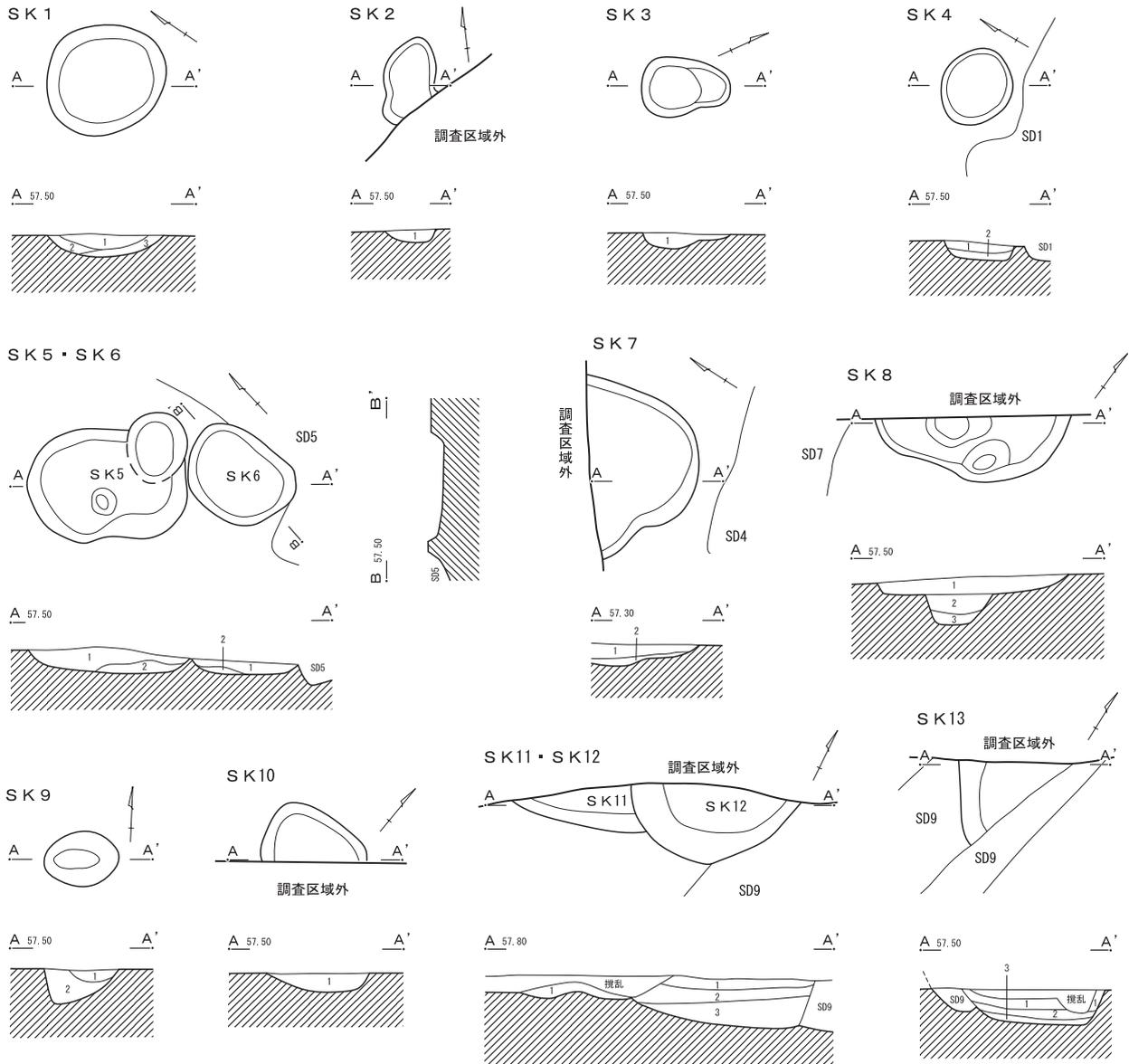
第13号土壌 (第17図)

第13号土壌は、北区北東側のB-4グリッドに位置し、第9号溝と重複している。

新旧関係は、第9号溝より新しいと考えられるが、土壌の東側は、溝の立ち上がりに沿った形で構築されているため、本土壌は第9号溝跡に伴うか、溝跡を利用して構築された可能性が考えられる。ただし、第9号溝跡の底面付近では、切り合い関係があるため、第9号溝が埋没した段階で土壌を掘削したと考えるのが無難であろうか。

平面形は不明とせざるを得ないが、西側は比較的直線的であるから、長方形または三角形に近い形を呈することが想定される。

検出範囲における規模は、調査範囲において長軸長 1.00 m、短軸長 0.44 m、深さ 0.3 mを測り、長軸方位はN-57°-Eを指す。



- SK 1
 1 黒褐色土 黄褐色土粒子が斑に混入 しまり・粘性弱
 2 褐色土 しまり・粘性弱
 3 黄褐色土 しまり・粘性弱
- SK 2
 1 暗黄褐色土 しまり・粘性弱
- SK 3
 1 暗黄褐色土 褐色土ブロック少量 しまり・粘性弱
- SK 4
 1 褐色土 しまり弱、粘性有
 2 黄褐色土 ソフトローム主体 しまり弱、粘性有
- SK 5
 1 黒褐色土 黄褐色土粒子が部分的に混入 しまり・粘性弱
 2 黄褐色土 ソフトローム主体 しまり弱、粘性有
- SK 6
 1 褐色土 しまり・粘性弱
 2 黄褐色土 ソフトローム主体 しまり・粘性弱
- SK 7
 1 黒褐色土 黄褐色土ブロック少量 しまり・粘性弱
 2 黄褐色土 ソフトローム主体 しまり弱、粘性有

- SK 8
 1 褐色土 しまり・粘性なし
 2 黄褐色土 黒褐色土ブロック多量 しまり有、粘性強
 3 黄褐色土 黒褐色土ブロックやや多量
- SK 9
 1 暗黄褐色土 しまり・粘性弱
 2 褐色土 しまり・粘性弱
- SK 10
 1 暗黄褐色土 しまり・粘性弱
- SK 11
 1 褐色土 黄褐色土粒子少量 しまり・粘性弱
- SK 12
 1 暗褐色土 しまり・粘性弱
 2 黄褐色土 黒褐色土ブロック多量 しまり有、粘性強
 3 黄褐色土 黒褐色土ブロックやや多量
- SK 13
 1 暗褐色土 黄褐色土粒子少量 しまり・粘性弱
 2 明褐色土 黒色土粒子少量
 3 褐色土 黒色土・黄褐色土粒子多量



第 17 図 土 壌

4. ピット

ピットは、合計で15基検出された。いずれも北区から検出されたものである。第27号墳の周溝から検出されたこの内5基のピットについては、古墳跡に伴って構築された可能性を勘案し、古墳跡の項で扱ったため、本項は残りの10基を対象として報告を行う。なお、規模等のデータについては、第9表にまとめた。

分布については、極端な集中域は認められないが、B-4グリッド及びD-1グリッドにある程度のまとまりが確認される。他は、C-2、C-3、D-4グリッドで各1基ずつ検出された。

いずれにせよ、現段階では掘立柱建物跡や柵列と断定するに至る配列は認められない。

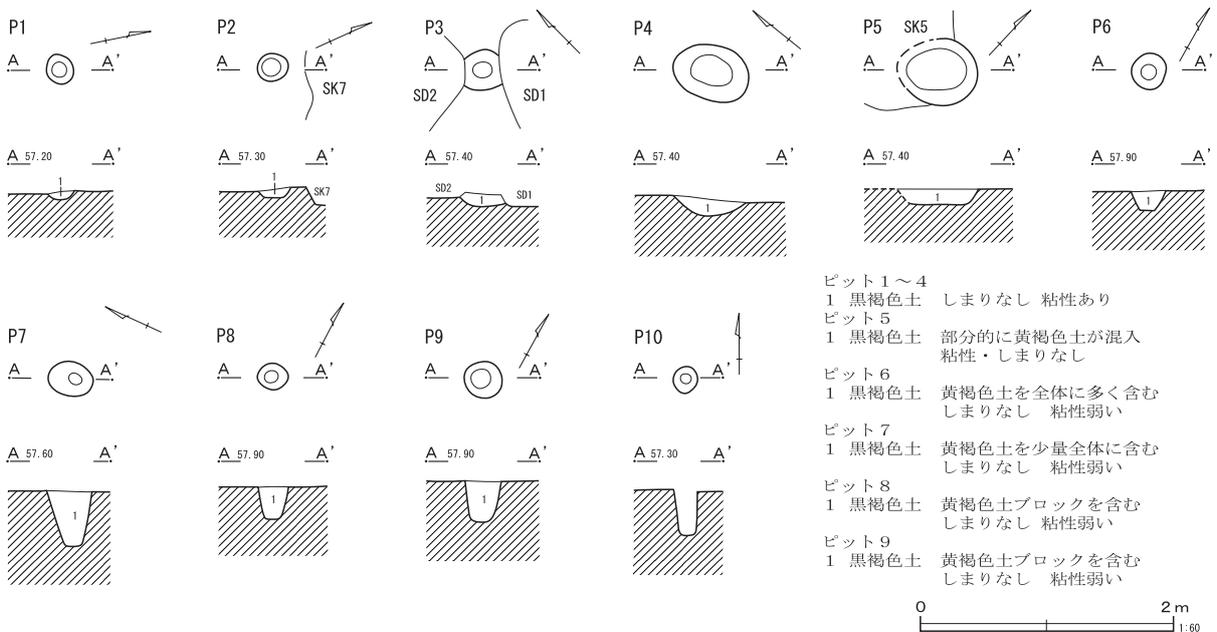
ただし、調査区の制限もあって建物跡の全容を見つげ出すことは困難であることが想定されことから、これらのピットが建物跡を構成していた可能性も捨て切れないところである。

B-4グリッドに位置するP6~P8は、周囲に他の遺構が存在しない空地となっており、建物跡が存在していた可能性も考えられる。

時期については、根拠となり得る遺物の出土もないため、不明とせざるを得ないが、周囲の状況からは、それほど古い遺構とは考え難い。他に調査区内から検出されている土壌や溝跡と大きな差はない時期に構築されたものと考えるのが自然であろう。

第9表 ピット計測表 (単位はcm)

番号	グリッド	平面形	長径	短径	深さ	重複	番号	グリッド	平面形	長径	短径	深さ	重複
P1	D-1	円形	23	20	6	SD1・2	P6	B-4	円形	39	27	16	
P2		円形	24	22	7		P7		円形	35	28	44	
P3		円形	(28)	24	10		P8		円形	24	20	24	
P4	D-2	楕円形	60	44	17		P9		円形	29	28	31	
P5	C-2	楕円形	(64)	(54)	13	SK5	P10	C-3	円形	21	20	39	



第18図 ピット

5. グリッド・表採遺物

本章では、グリッド出土及び表面採集によって得られた遺物の中で、図示可能なものを取り上げて掲載する。出土した遺物は殆どが細片であるため、僅かな遺物しか掲載することができなかったが、縄文時代、古墳時代、近世の遺物が確認された。

縄文土器は3点出土した。いずれも小片であるが、中期の加曾利E式期のものであろう。

1は下記2点と比べやや薄手で、胴部下半の破片と思われる。地文には、細かい単節RLの縄文が縦位に施文され、右端に懸垂文が認められる。

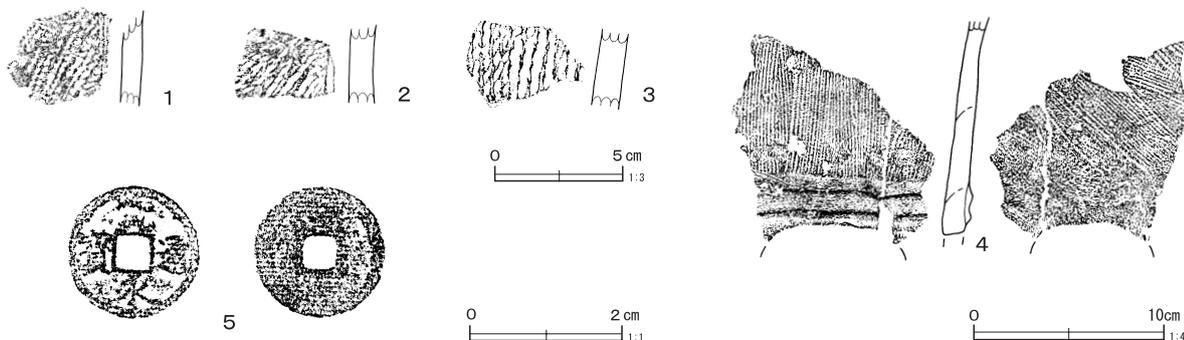
2は深鉢の頸部付近の破片である。地文には1の原体による撚糸文が斜位に施されており、図右端には縦位の懸垂文が認められる。

3は胴部破片である。1の撚糸文が縦位に施文されるが、原体は太く押捺も深く明瞭である。

古墳時代の遺物は、北区北東端のA-5グリッドに埴輪片がまとまって散布していたが、いずれも小片であるため、図示できたのは僅か1点である。A-5グリッド付近は、谷地形となっており、この地形に従って流れ込んだものと考えられる。

4は普通円筒埴輪の最上段の破片で、北区北東端のA-5グリッドから出土した。外面調整はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整を施す。突帯は低平な断面M字形で、上下稜とも明瞭である。透孔は突帯の下端を切り込んだ、上辺のやや直線的な楕円形と推定される。

5は調査区表採の寛永通寶である。著しく摩滅しており、銭名もやや不鮮明であるが、書体の特徴から古寛永であることが判読できる。銭径23mm、厚さ0.8mm、重量2.07gである。



第19図 遺構外出土遺物

第10表 遺構外出土円筒埴輪観察表(第19図)

番号	器種	部位	法量 (cm)	①胎土②焼成③色調④残存	ハケメ	調整・手法の特徴	備考
4	円筒	体部		①A:小礫を多く含む②普通・軟質③赤褐 5YR4/8 ④破片	12本	外面はタテハケ調整で、内面はナナメハケ調整を施す。突帯は低M字形で、突出の高さは約4mmである。上下稜とも明瞭。透孔は右回り穿孔で、ナデ調整を施す。	A-5グリッド No.32,49

V 調査のまとめ

1. 古里古墳群について

古里古墳群は、北部比企丘陵の北端部に位置し、滑川の開析谷に面する丘陵頂部から斜面にかけて分布する11支群50余基の古墳と岩根沢横穴墓からなる古墳群である(嵐山町2003、塩野2004)。熊谷市との行政界にあるため東側丘陵部に分布する熊谷市塩古墳群とは区分されているが、本来は一体のものである。

今回報告する駒込支群は、古里古墳群の東端、駒込沼を源とする小谷を挟んで塩古墳群第三支群(西原地区)と対峙する丘陵先端部付近に集中して分布している。これまでに26基の古墳の所在が確認されており、古墳群中最大の支群である。墳丘はすべて規模が20m未満の小円墳で、主体部は不明であるが、ほとんどの古墳から埴輪が出土している。

今回の調査は、県道拡幅に伴う小規模な調査であったが、北区中央部から新たに1基の古墳跡(駒込27号墳)が発見された。

駒込27号墳は、丘陵裾から滑川の沖積面に向う緩斜面に立地し、支群の南東端にあたる。東・西区の調査状況から、本墳より南東方向は緩やかに傾斜する谷地形になっており、古墳群の南東方向の分布域の限界をとらえることができた。

調査区の制約から古墳全体の南側約1/4周に相当する周溝を検出したにすぎないが、墳丘径12～13mの円墳に復元される。周溝は、周溝外側に幅広い緩やかな斜面部が造作され、周溝幅2.4～2.6m、深さ45～65cmの逆台形の掘り込みをもつ。遺物は、周溝から土師器環と少量の埴輪片が出土した。

築造時期は、出土した模倣杯の特徴から6世紀前半を中心とする年代に位置づけられる。なお、築造当初古墳に埴輪が樹立されていたかどうかは、埴輪の出土量が少なく明らかでない。

駒込支群に関する考古学的な知見としては、嵐山

町指定文化財の「頭巾帽を被る男子」「鞆を背負う武人」の2体の人物埴輪の出土が著名である。発掘調査の実施された古墳は少ないものの、地元に残されている古墳出土遺物をはじめ、駒込7号墳から出土したTK47型式併行の須恵器坏蓋の資料紹介(永井2007)、立正大学考古学研究会による駒込・尾根両支群を中心とした分布調査の成果報告(立正大学考古学研究会2002)など地道な研究成果が積み重ねられている。

駒込支群の群構成や形成過程を跡付けるためには、宅地や墓地等の造成や開墾によって消滅してしまった古墳が多く、不明な点が多いのが実情である。しかし、古墳の分布状況から標高70m付近の丘陵斜面上位に分布する一群と丘陵斜面下位から丘陵裾部にかけて密集する一群に大きく二分することができる。前者は「山寄せ墳」的な立地を示し、7世紀前半の横穴式石室をもつ円墳によって構成されている。後者は主体部に横穴式石室・木棺直葬・箱式石棺等が混在したあり方を示し、埴輪を樹立する古墳によって占められている。

僅かな考古学的知見からだけであるが、本支群は6世紀前半から7世紀前半にかけて継続的に築造されており、その開始時期は5世紀に遡る可能性が高い。6世紀前半を中心に竪穴系主体部をもつ古式群集墳として丘陵斜面下位から丘陵裾部に広く展開した後、横穴式石室をもつ新式群集墳として丘陵斜面上位へと墓域を拡大したことが予想される。

今後は隣接する熊谷市塩古墳群を含めた古墳群全体の変遷過程の解明から、北部比企丘陵に分布する東松山市三千塚古墳群や市野川流域の滑川町月輪古墳群、和田川流域の野原古墳群との関連性を明らかにし、丘陵部に展開する古墳群を地域社会の枠組みの中に歴史的に位置づけることが課題である。

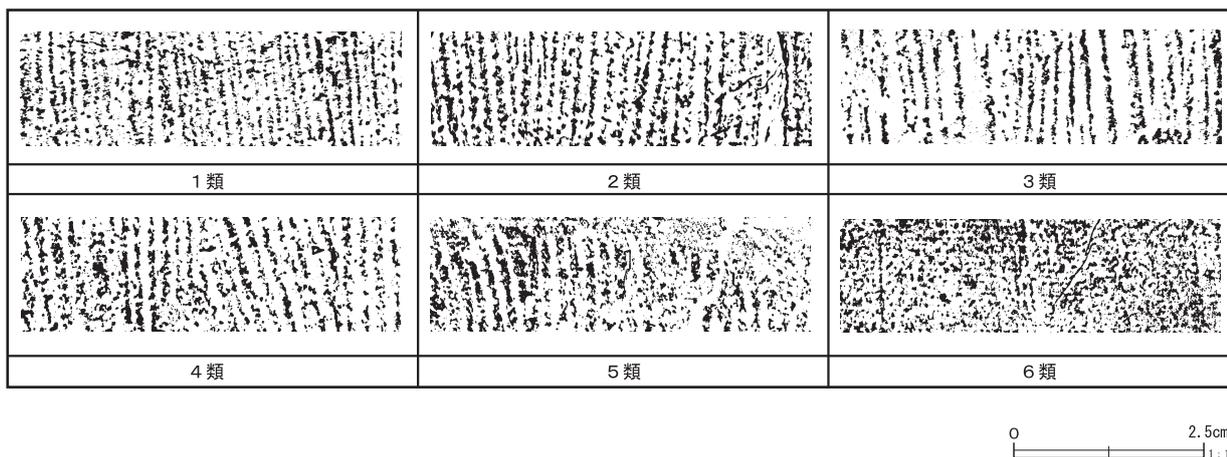
2. 第7号溝跡出土埴輪の検討

駒込27号墳の東側に近接する第7号溝跡から完形に近い円筒埴輪を含む多量の埴輪片が、一括廃棄された状態で出土した。調査範囲が小面積であることもあり、どのような理由で溝跡に埴輪が捨てられたのか、明らかにすることはできなかった。しかし、出土した埴輪は、周辺の古墳から抜き取られたものであることは間違いなく、古里古墳群における埴輪の様相を知るうえで参考となる。

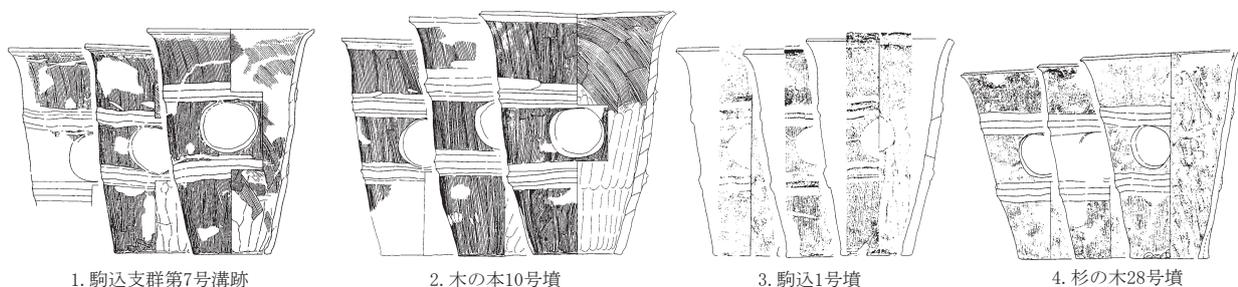
ここでは器形や各部の形状（口縁部・突帯）、ハケメ工具の異同（第20図）から6類に分類された円筒埴輪のうち、全体の器形のわかる1類を中心に、編年的位置づけについて整理したい。

1類（第21図1）の属性を列記すれば、二条三段構成の小型品で、やや寸詰まりのプロポーシオン。突帯は、稜の鋭い低M字形を呈する。透孔は第二段目に対向するように穿ち、径の大きな円形である。口縁部は外反し、口唇端部が外を向き、ほぼ垂直に立つ。外面調整はタテハケ調整で、第三段目でやや交差するように施す。内面調整は、底部から中位がタテナデ調整、中位から口縁部がナナメハケ調整を施す。口縁部内面に大きく「×」印のヘラ記号を描く。ハケメは1類である。

まず、1類の型式的な大きな特徴であるプロポーシオンについては、底径：口径：器高 = 1：2.1：



第20図 ハケメ分類図



第21図 第7号溝跡出土円筒埴輪の同一類型 S = 1/12

2.8の構成比を示し、やや太目の印象を与える。それは、器高に対して口縁部径が大きいことに起因するものである。一般に中期の円筒埴輪は、口縁部が直立し、口径と底径の差の少ない寸胴形を呈する。それに対して後期の円筒埴輪は口縁部が大きく外反して開き、底部を大きく上回る。しかし、後期後半段階には口径・底径とも縮小し、細身化が顕在化する傾向が認められる。また、各段間は第一段：第二段：第三段=1：0.8：0.8で、均等分割を意図していることが読み取れる。ただし、突帯に波打つように貼付された部分も見受けられ、中期から後期初頭の円筒埴輪に見られる突帯間隔設定技法（凹線）が省略され、後期の円筒埴輪に通有な突帯を一括して貼付する「通段割付」（犬木 2008）によって突帯設定がなされていることが分かる。つまり、1類は突帯間隔に古い様相を残し、細身化していないことから後期前半段階に位置づけるのが妥当であろう。

逆に形式的に新しい要素としては、低M字形の突帯形状がある。しかし、後期の円筒埴輪では突帯の変化が急激で、形式的に古いものと新しいものが共存する場合が多く、必ずしも時期的変遷を示す有効な指標とはならないことが指摘されている（坂本

1985）。

こうした型式学的な特徴を共有する同一類型として、深谷市木の本 10 号墳（第 21 図 2）、嵐山町古里古墳群駒込 1 号墳（同図 3）、東松山市杉の木 28 号墳（同図 4）が挙げられる。

紙幅の都合で、類例との詳細な検討は省略するが、大里・比企地域に分布のまとまりがあり、地域的な類型として設定し得る可能性があるだろう。

円筒埴輪の編年観については山崎武氏による編年案（山崎 2000）を参考にすれば展開期に相当するⅡ期に比定され、6 世紀前半を中心とする年代に位置づけられる。

今後の円筒埴輪の編年作業にあたっては、「最下段幅」の数値化による資料操作だけでなく、同工品論的視点からの「系統」識別を重視した型式学的な検討が最も重要である（城倉 2009）。

最後に、形象埴輪についても若干ふれておく。断片的なものが多く、十分な検討はできないが、人物埴輪の腕部に木芯中空成形技法が認められる点は留意される。県内における木芯中空成形技法は 5 世紀末に出現し、6 世紀前半を中心に盛行したことが指摘されており（山崎 2004）、先の円筒埴輪の年代観と矛盾しないことを付言しておく。

引用・参考文献

- 犬木 務 2008 「円筒埴輪の形態論—突帯配置と透孔穿孔—」『現代の考古学第 4 巻 生産と技術の考古学』朝倉書店
- 植木 弘 1987 『古里古墳群—北田遺跡・上土橋支群・駒込支群の発掘調査—』嵐山町遺跡調査会報告 2 嵐山町遺跡調査会
- 埼玉県教育委員会 1994 『埼玉県古墳群詳細分布調査報告書』
- 塩野 博 2004 『埼玉の古墳』さきたま出版会
- 城倉正祥 2009 『埴輪生産と地域社会』学生社
- 永井智教 2007 「嵐山町古里古墳群採集の古式須恵器」『比企丘陵』第 7 号 比企丘陵文化研究会
- 宮島秀夫・江原昌俊 2003 『杉の木遺跡（第 3 次）』東松山市文化財調査報告書第 24 集 東松山市教育委員会
- 山崎 武 2000 「埼玉県の円筒埴輪の編年について」『埴輪研究会誌』第 4 号 埴輪研究会
- 山崎 武 2004 「埼玉県岡部町千光寺 1 号墳出土の埴輪について」『幸魂—増田逸朗氏追悼論文集—』北武蔵古代文化研究会
- 嵐山町 2003 『丘陵人の叙事詩—嵐山町の原始・古代—』嵐山博物誌第 4 巻・考古・歴史編
- 立正大学考古学研究会 2002 『第四聯記』平成 14 年度活動報告